

## プロローグ・佐々原三月

沈……と。

カーテンの閉め切られた第三会議室に、生気のない静寂が落ちていました。

天井では、古びた蛍光灯があえぐような光を投げかけてきています。なまじ清潔な白光は、居並ぶ女性たちの姿を氷壁のように彫刻していました。

一方窓に目をやれば、灼け付く夕日がカーテン越しに赤黒い埋み火を成していて。

——紅蓮の不吉をにじませた、極寒の室。

普段は、生徒会の催すよろず悩み相談室であるところの「迷わない子ひつじの会」に使われている、この部屋です。いつもなら和氣藹々たる歓談の場が、今は、厳たる審問の庭と化していました。

わたし、佐々原三月を含む六人の女子がコの字形に並べられた長机に着き、取り囲むは

本日の被告人——子ひつじの会における相談者席である骨董品のチェアに、一人の男子が拘束されていました。

見慣れた童顔に呆然とした表情を浮かべ、自分の足下を見つめています。

その正面、いつもの上席<sup>じょうせき</sup>で、

「さて——」

会長が、顔の前で手を組んで口を開きました。

「これより、密室バレンタイン事件の甘味<sup>イंक</sup>審問<sup>エスト</sup>を開始します」

数日前から見事に晴れ渡っている空を、夕日が赤く赤く、ひたすら赫<sup>あか</sup>く焼き払う。

二月十四日。

春を間近に望む、でもまだ冬の、ひとときわ寒い日の事でした。

『子ひつじは迷わない』番外編

# VS 毒突きチヨコレート事件

## Part-A：佐々原三月

「あの……僕はどうして捕まっているんですか？」

相談者用の洋椅子にロープで縛り付けられた被告人——なるた成田真一郎まいちろうくんが、不理解に戸惑った声を出しました。

会長はうつつすら開けた片目で成田くんをいちべつ一瞥して——ばっさり無視して話し始めます。

「事件が発覚したのは今日、二月十四日の昼休み。正確には一二時四二分よ。

現場は本館一階の生徒会室」

そこで、隣に座る生徒会会計の宮野さんに顔を向けました。

「証拠物件マルフタヒトヨン0214号を」

「しかるべく」

宮野さんは肃々と立ち上がり、成田くんの目の前に問題の品を示しました。

——ちようど両掌<sup>たうてのて</sup>分くらいの大きさで、白地に赤いストライプ柄<sup>がら</sup>の包装紙でラッピン  
グされた、平べったくハート形の何か。

裏返してみると、「成田くんへ」と瀟洒<sup>しやうせ</sup>な字体で印字されたカードが貼り付けられています。他には何も記されていません。包装紙は剥がされていないので、中身がどうなっているのかも判りません。

しかし。

今日は二月一四日で、ハート形なのです。

その正体は、火を見るより明らかだと言えるでしょう。

「その証拠物件は、生徒会室のテーブルに置かれていたところを、宮野さんが発見した物  
よ」

会長が語る中、それを宛てられた「成田くん」は、やっぱり理解できない顔でそれを見  
つめていました。

「被告人」

氷を研いだような声音が、薄く開いた会長の唇から成田くんへ吹き付けます。

「それは、なんですか？」

「え？ 被告人て——」

聞き返そうとした成田くんの後頭部がパコン！ と快い音とともに叩はたかれました。

「貴様に決まってるよ、このブタ野郎！」

獄吏のように成田くんの傍らに立ち、ためらいなく警棒——ではなく丸めたノートを振り抜いたのは、我が校の制服を着込んだ、でも実は中学生の女の子でした。

どこから調達したのか制服は大分パツパツになっていて、特に胸回りは著しく不相应です。ブラウスのボタンが一つ飛んでいました。

可愛らしい容姿とは裏腹に、むつつりと不機嫌な顔で成田くんを見下ろしています。成田くんは怨めしげに睨ねめ上げられても、ふンツと鼻息で小突いてそっぽを向きました。

「なんなんだよ一体……？」

文句は無駄だと前に向き直った成田くん。その彼に、

「どうなの？ それはたまくん宛ての不審物なのだから、心当たりくらいあるでしょ？」

ねち。

ねち、と。

会長の紡ぐ言葉の蜘蛛糸が絡み付いていきます。

「え、ええと……その……」

成田くんは困ったように視線をさまよわせて——わたしと目が合うと、なぜか怯えたようにびく、と肩をすくめて——なんでしょう、わたしが怖い顔をしているとでも言いたいのでしょうか——それから、渋々といったように答えました。

「ば、バレンタインチョコレート……なのではないかと。たぶん……」

「そうそう、それ。バレンタインチョコ。」

ど忘れしちゃったんだけど、それは一体、どういう意味のある物だったかしら」

成田くんは言葉を選んだようでした。その黙考は何か振動を伴うものだったらしく、「目が泳ぐ」どころか溺れかけて命からがらといった様でした。

「……一般的には、女性が男性に……ええと……親愛を込めて渡す物、かな？」

「へえ」

「……………」

「親愛されちゃってるのね」

「ええと……たぶん……」

「うれしい？」

「それは……まあ、うれしくないことはない、です、けど……」

「へえ」

「……………」

成田くんは頬にナイフを当てられたような顔色をしていました。しかし、この部屋で彼を囲む七対ななつたいの視線に、容赦のそれはありません。

会長は、いつものように笑顔を浮かべていました。世の中には「笑っていない笑顔」という、辞書の上にはありえない表情が実在します。

そんな「類推の笑顔」が、糸に絡からめた獲物を噛み砕きにかかりました。

「赤いラッピングでハート形で——どう見ても本命チョコねえ」

血の気の引いていた成田くんの顔が、ちよつとだけ赤くなつた気がします……む。

「そ、そうです……か？」

「ねえ」

「はい？」

「たまくんの方で本命チョコをもらつていいとも思っているの？」

「それは酷くない!？」

？ 成田くんが抗議の声を上げましたが、今の会長の発言のどこに理不尽な点があったと言うのでしょうか？ 不思議です。

「なんで僕が本命ぽいチョコをもらつたら被告人扱いなんだよ!？」

「え？ 法律って知らない？」

「知ってるけど違反はしてない！」

「それは本当に、わたしたちが言うのと同じ法律ホウリツですか？ 英語で言うところの「ロウ」のヤツですよ？」

「佐々原まで!？」

あーもー！ と椅子に縛り付けられたままバタバタと地団駄を踏む成田くん。なんとも往生際の悪いことです。

成田くんが疲れてうなだれるまで緊縛タップダンスを見物してから、会長は一転して軽やかな声で言いました。

「まあ、それはどうでもいいんだけど」

「どうでもいいのにあんなに責められたの……？」

そうですよ？

「問題は、そのチョコレートが発見された状況よ。」

さっきも言ったように、密室だったの」

なおもうじうじと抗議を続けようとしていた成田くんですが、会長の言葉、その内容に、ひたりと口を閉じました。

密室。その二文字に無限なロマンを詰め込んだ、ミステリーの王侯です。

「生徒会室はわたしたち生徒会役員が利用している間だけ開放されて、それ以外の時間は終日施錠されているわ」

生徒会の役員である会長、宮野さん、成田くん、それに佐々原わたしには、無論のこと既知の事実です。しかし、この部屋に居る半数はその事実を知りません。そのため会長の説明でした。

「昨日は放課後、午後四時前から五時過ぎまではわたしたちが使って、それからきっちり鍵を閉めて帰った。でもって、それ以降は職員室のキーボックスに保管されていた。キーボックスは当番の先生以外にはまず開けられない」

その先は、元の席に戻った宮野さんが続けます。

「でもって、今日になって初めて生徒会室に入ったのは昼休み。

手芸部から預かった文化祭の時の衣装を返すことになってね。頼まれて、わたしが鍵を開けた。その時に鍵の貸し出し記録を見たけど、それ以前に生徒会室の鍵を借りた人間はいなかったわ。

そうして生徒会室に行ってみたら、このチョコを見つけたの」

いつも、部屋を出る前に忘れ物がないよう一通り見回してから帰るのですが、その時にはあんなに目立つチョコレートはありませんでした。

そうッ——と、会長が力強く拳を握って宣言します。

「つまりこのチョコは、密室の中へ忽然と出現したのよ！」

でもって、これは不法侵入の疑いにもなる。ゆえに事件——密室バレンタイン事件！  
罪に問うかはともかく、犯人は突き止めておく必要があるわ」

「なるほど」

今日初めて会長の言葉に納得できたらしく、成田くんは神妙にうなずき、それから部屋の中を見回しました。

「それで密室か……でも、なんでこのメンツが集まってるんですか？」

居並ぶ面々の半分は、普通なら生徒会室にも子ひつじの会にも出入りすることのない人々です。

一人は先ほど成田くんを殴打した中学生で、サトウさん（仮）といえます。なんでもこの学校にお姉さんが通っているとかで、去年の初夏以来、何かと縁があつて子ひつじの会などで顔を合せている娘さんです。

そのサトウさんが、成田くんの頭を木魚のようにチャカポコ叩きながら答えます。

「わたしは、お姉様にチョコを持ってきたら」

サトウさんは会長のことを「お姉様」と呼んでいたく慕っています。

「マヤ文明の予言がちよいと遅れて成就しそうだと聞いて、様子を見に来たんだよ」

「僕がチョコをもらうと人類が滅亡すんのか……？」

「人類滅亡はありえない。変態がチョコをもらうのもありえない。同等の事実だよ。

であれば、変態がチョコをもらう超展開が現実になったその時に人類が滅亡しても、不思議はないことになるよ」

なるほど一分の隙もない完璧な論理です。わたしはふむふむとうなずきました。成田くんも「ぐうの音も出ない」というところだったのか、溜息を吐いて話頭を転じました。

「ところで、その制服は明らかにお前の物じゃないよな。どこでかつぱらって来たんだ？」

「失礼な！ この服は、ちよいと姉のスペアを借りてきただけだよ！」

ちなみに無断でね、と言いながら、元気の余剰で膨らんだような自分の胸元を示して見せるサトウさんです。はち切れそうなシャツの惨状を見るにつけ、サトウさんのお姉さんは相当に小柄でスリムな方かたのようです。

あれではもうダルダルに伸びてしまうのではないかと思います。お姉さんは怒らないのでしょうか。

などとわたしが心配している内にも、会長の説明が続きます。

「他の三人は、生徒会役員以外で昨日から今日にかけて生徒会室に入った人間よ。

つまり、風邪で休んでる副会長を除く役員四人と、その三人がこの密室バレンタイン事件の容疑者ということになるわ」

偶然なのか必然なのか、成田くんを除く容疑者は六人ともが女生徒です。

会長はやおらに立ち上がり、改めて部屋の中の「容疑者」たちの紹介を始めました。まずは自分の豊かな胸に手を添え、歌うように。

「容疑者その1！

たまくんの美しき幼馴染み。近所の優しいお姉さんにして全力で尊敬すべき生徒会長、竹田岬。——つまりこのわたしツツツ！」

なぜかハイテンションで、微妙に巻き舌でした。

「被告人と容疑者が別なんですわねっていうのはさておき、厚顔無恥って四文字熟語の意味を有機的に理解できた気がします」

余計な間の手を入れた成田くんは、会長が無造作に投げたペンで額を強打して悶えました。

その声にならない苦鳴くめいをパーフェクトに無視して、会長のしなやかな手は隣の宮野さんを指します。

「容疑者その2！」

生徒会の鉄血てつけつ會計にしてチョコの発見者。ある特定の意味で男性に興味津々！ 倒錯とうさく乗法じようほうの伝道者、宮野一恵みやのかずえツツツ！」

「まー、ぶつちやけあたしは、あんまり興味ないんだけどねー」

宮野さんは頬杖を突いて、退屈そうに問題のチョコを眺めていました。

しっかり整ったショートカットの合間から奇麗な額のぞの覗く、明朗でさばさばした、会長とはまた違った魅力のある先輩です。

興味がないというのは多分、本心だと思えます。宮野さんとはもうすぐ丸一年の面識になります。成田くんへの関心はあくまで後輩の男子に向けるそれを越えていないように見えます。

「つたく……容疑圏内に男子がいれば少しはやる気になるのにねー」

……丸一年の付き合いになんなんとする宮野さんですが、時折垣間見せる御趣味の方は全く理解できません。それはともかく。

次に会長の手が示したのは——わたしです。

「容疑者その3！

生徒会の書記で、被告人と何かと行動をともしてるって言うかちよっとしすぎだろうという無二のパートナー。明鏡止水のカリグラフィーにふわふわメンタリテイー、静かなる佐々原三月ツツッ！」

……………

パートナー、でしょうか？ 無二でしょうか？

と、うなじに血が登るのを感じながら成田くんを見やりますが、被告人はまだ投げペンのダメージが抜けないらしく、今のキャプションは聞こえていないようでした。……むう。その代わりとでも言うように、わたしの対面——成田くんを挟んで反対側——の席からは忌々しげな舌打ちが聞こえましたが。

続いて会長が紹介したのはその邪悪な舌打ちの主ではなく、わたしの隣に座った上級生でした。

「容疑者その4！

子ひつじの群れに迷い込んだ俊足の三毛猫！ イヂメて楽しい陸上部二年生、鹿野桃子しかのとうこ ツツツ！」

「なんだよその説明!？」

抗議の声を上げて立ち上がったのは、ジャージ姿の鹿野桃子さんです。彼女は生徒会役員でも各種委員会の長でもありませんが、なにかと縁があつて子ひつじの会のイベントにはほとんど参加してもらっています。

制服のシャツの上にジャージを着込んだ姿がトレードマークですが、今は本来部活動に参加している時間なので、下はトレーニングウェアのようです。スパッツから伸びるしなやかな脚は、冬の寒さでますます引き締まっているように見えました。昨日、部活動の休憩に生徒会室を訪れた時もこんな格好でした。

「そうですよ会長」

ようやく立ち直ったらしい成田くんも、鹿野さんの不満に荷担します。

「楽しいってより、美味おいしい感じなんですから」

「おいし……って、い、意味判んない！」

「むしろ究極のメニューですよ」

「だから何だよ!？」

そうやっていちいち全力で反応するから、からかわれてしまうのではないのでしょうか。鹿野さんに対する時の成田くんは、ネコジャラシにも勝る存在なのです。

確かに、ボーイッシュな短髪を震わせて「フーッ」と成田くんや会長を威嚇する様は世慣れない野良猫を思わせて、むやみに構い付けたくなくなるのも解ります。

そんな仕打ちを受けている鹿野さんですが、成田くんにはむしろ好意的な節があります。去年の春、発足して間もない子ひつじの会で相談に乗ったとある事件で、鹿野さんと成田くんは何か……心を通じ合わせる出来事があったようなのです。

以来、元から男女の別なく社交的で人懐っこい鹿野さんだけに、学年の違いがあるにもかかわらず成田くんと親しくしているようです。なんか割りと平気でくつついたりもしますし。成田くんは成田くんで、寄ってきた鹿野さんを弄ぶのがお気に入りようですし。まさに端倪たんげいすべかざる人物、なのです。

「容疑者その5！

純白の微笑と漆黒の五臓六腑、被告人の幼馴染みッ。童心の面影は黒き鋼くわの面の皮、鬨うファム・ファータル松宮楓まつみやかほツツツ！」

次に会長にコールされたのは、先ほどの舌打ちの主——わたしの対面の席に座る、儂げ

な美貌の持ち主でした。

しかし騙されてはいけません。会長の言う通り、松宮さんはその幸薄さちうすげで弱々しい容姿を自覚し、周囲の同情心を煽って利用するような人面獣心、傾城亡国けいせいのモンスターなのです。

冬場だからか、それとも男子ウケが良いからか——高確率で後者です——夏よりもだいぶ伸ばした黒髪をわざとらしくふあさつとかき上げ、松宮さんは会長に鋭い流し目を向けました。

「愛想笑いの形に固まった鉄面皮の生徒会長に褒めていただいて光栄です」

「あら？ 我ながら柔らかい顔をしてるつもりなんだけど？」

自分の頬をむにむに捏ねて見せる会長と、視線に錐を宿す松宮さん。会長は満面の笑顔ですし松宮さんも一見穏やかな顔をしています。その間に漂う緊張感は、あたかも互いの意志が帯電して空間を歪ませているようでした。

会長と松宮さん、そして成田くんの三人は、小学生の一期をともに過ごした仲だと聞いています。それはそう長い間のことではなく、松宮さんの不幸を伴う転校によって突然終わったようですが、だからこそ鮮烈な記憶となつて残っているのでしょうか。

会長とはその頃から不仲だったようですが、その一因は恐らく、

「楓、お前ちよつと顔色悪いぞ。ダイエットのし過ぎじゃないか」

明らかに唐突かつデリカシーの無い発言をした成田くん、なのだと思えます。

松宮さんは、台所の隅にカビ汚れを見つけたような目で成田くんを睨みました。

「……なんの話？」

「母さんが、低カロリー料理のレシピを聞かれたって言ってたぞ。お前ひよつとして、太ると弱々しいイメージが崩れるとか思い込んで無理してないか？」

「……………」

松宮さんが無言でそっぽを向いたのは凶星だったからでしょう。相変わらずさもしい努力を欠かさない女です。

松宮さんは引越す前には毎日のように成田くんのお家へ遊びに行っていたとかで、漏れ聞いたところでは、今日でも松宮さんと成田くんのお母さんは日常的にメールを交わす仲だということです。（IT用語ではメル友と言います。知っていましたか？）

一方で、松宮さんは成田くんとは一定の距離を取っていたがっているようですが、成田くんは不用意な接近を繰り返しています。子供の時の友達関係が、今もそのまま続いているものと思つていのでしょうか。

それを、てんで噛み合わないと見るか凹凸のバランスが取れていると見るかで、二人の

関係は大きく変わって見えるでしょう。

わたしなどは彼と彼女の関係は不毛なような、ずるいような距離感に見えるのですが、たとえば――

「うふふ。成田くんは、ちよつとくらい太っても楓ちゃんはキレイだって言いたいんだよね」

松宮さんの隣に座る彼女のように、なにかいろいと誤解している人もいます。そしてその彼女こそが、最後の容疑者なのです。

「そして容疑者その6！

松宮さんの親友にして手芸部新部長、当学園のザ・良心！ あとは、ええと……なんかリボンがデカイ！ 春日友佳<sup>かすが ゆか</sup>ツツツ！」

「えっ？ ええ？ そ、そんなに大きいですか？」

会長の煽りに真正直に狼狽<sup>ろうばい</sup>して、自分の後頭部で結ばれたリボンを両手で押さえる彼女は、一年D組の春日さんです。小作りな体格に反して表情は豊かで動作は大げさで、何かしら茶色い小動物を連想させるような人です。

松宮<sup>なにかがし</sup>某と違って内面まで可愛らしい人で、わたしも好感しか持ってないのですが、

「いいでしょ可愛いんだから！ ぶち殺すわよ妖怪糸目女！」

さっきまでの取り澄ました態度から一転、ガタン！ と物凄い勢いで立ち上がって会長を睨み付ける松宮さんの春日さんへの執着は、およそわたしの比ではありません。

演技に演技を重ねて自分を鑑よつた——そうしないと生きてこれなかった——松宮さんにとつて、どんな正体があっても友達でいる覚悟をしたと言ってくれた春日さんは、あるいは他の全人類と秤はかりに掛けてもなお大切な相手なのかも知れません。

「あ、ありがとう楓ちゃん。でも落ち着いて……」

その至宝・春日さんは、おろおろと顔を赤くしてアグレッシブな親友の袖そでを引いています。はッと我に返って咳払いする松宮さんに、会長はくらくらりと弁解しました。

「あら。よく似合ってるって褒めたつもりだったんだけどね。

ねえ、たまくんもそう思うわよね」

「え？ あ、うん……」

いきなり声をかけられて戸惑った成田くんは、ちょっと涙目の春日さんと目が合って、ますますあわてたようでした。

「い……いいんじゃないかな。どこにいても見つけやすいし。

この間も、休み時間に外眺めてたら、水飲み場で蛇口を回しすぎてびしょ濡れになって

る奴がいて『ああ春日だな』ってすぐ判ったし。リボンで」

「う、うそ！ 見たの!？」

恥ずかしい……と、春日さんは目尻へさらに涙を溜めてうつむいてしまいました。

「ブツ殺すわよ変態！」

当然、さつきより端的になった松宮さんの怒りの矛先が成田くんを襲います。殺気奔逸に投げられた折りたたみヘアブラシが、成田くんの側頭部をスコーンッ！ と小気味よい音とともに打ち据えました。

今日は椅子に縛られているので防御も回避もできず、いつにも増して滅多打ちな成田くんです。しかし、成田くんの分際で本命チョコレートを贈られるなどという未曾有の天変地異にわたしたちを巻き込んでいる最中とあっては、同情するわけにもいかないのです。

ここは、心が鬼になるのです。

………

もとい、心を鬼にするのです。

「だ、ダメだよ楓ちゃん！ カップルは仲良くしないと」

鬼となったわたしとは逆に、春日さんはあくまで優しく素直でした。今度は松宮さんが頭を抱えます。

「……春日さん。何か勘違いしているみたいだけど、わたしとその成田負犬郎マケイヌロウとの間に、なんら特別な関係は存在しないのよ」

噛んで含めるような口調でしたが、春日さんは微笑みました。一〇〇パーセント、なんの他意もなく、微笑ましいから微笑んだ——そんな笑顔でした。

「またまた、そんな。照れなくてもいいんだよ？」

「いや、そういうのじゃなくて」

春日さんは、きよとんと首を傾げました。

「だって、幼友達でしょ」

「……ええ」

「転校で離れ離れになって」

「うん」

「事件とともに再会して」

「そうね」

春日さんは、上等な湯葉のように笑顔をとろかせました。

「そしたら付き合おうでしょー」

「いやいやいや……」

無欠に純粹な視線で確信の言葉を浴びせられ、松宮さんは疲れたように座り込みました。どう説明したら解ってもらえるの……などとぶつぶつこぼしています。

どうやら春日さん、漫画研究会の中瀬さん（とても夢見がち）の友達なせいか、スイートな少女漫画基準で思考するところがあるようです。「劇的な再会を果たした異性の幼馴染み同士は恋し合うもの」だというのが、春日さんにとつての常識であり理想なのでしょう。そして、松宮さんは春日さんの理想のヒロインなのです。

春日さん自身は、成田くんに対して異性としての好意は抱いていないように見えますが、松宮さんとくつつけようと努力している節はあります。つまり、松宮さんをけしかける、ないし松宮さんを装ってチョコを贈る可能性がなくはないのです。

善良極まりない彼女ですが、容疑者から外すわけにはいかないでしょう。  
ちなみに。

「誰が負犬郎だ……」

成田くんの抗議のうめき声は、場の誰からも無視されました。

さて。

これで容疑者の人となりのおさらいはできました。

「では、事件の検証を始めましょうか」  
 会長に目顔で促されて、わたしはホワイトボードに生徒会室の間取りをまとめた紙を貼り付けました。(次ページ)  
 続いて昨日の放課後、生徒会室に起こった出来事を書き出します。

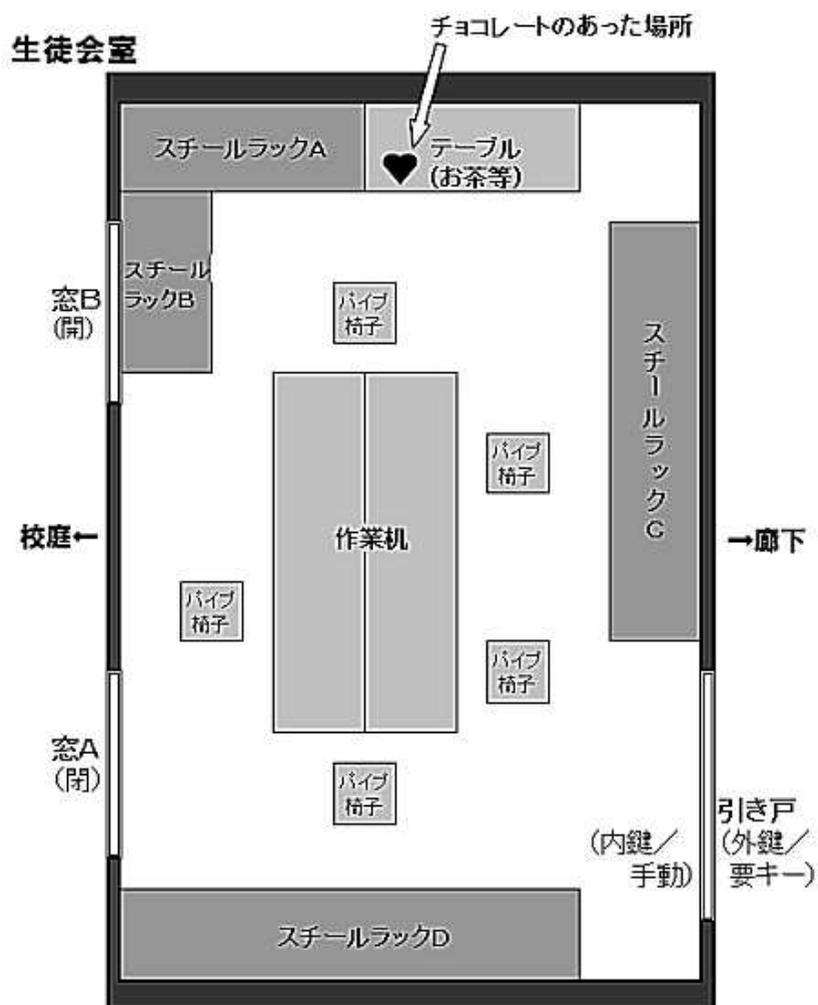
——こんなところでしょうか。(下図)

昨日から今日にかけて生徒会室に入りしたのが、この部屋に集まった七名だけであることが判るでしょう。

「あれれ……密室って言ってたけど、窓Bが開いてるじゃん」

### 時系列

日にち	時間	出来事
昨日	16:00	役員たち(会長、宮野さん、成田くん、佐々原)、庶務に励む。
	16:30	成田くんと佐々原、用事があって職員室へ。宮野さんはトイレへ。
	16:40	宮野さん、戻る。
	17:00	成田くんと佐々原、戻る。
	17:05	窓Aから陸上部の休憩中の鹿野桃子さんが声をかけ、中に入って紅茶を飲んでいく。
	17:10	鹿野さん、部活動に戻る。
	17:20	成田くんが最後に部屋を出る、会長が施錠。その時、部屋の中を見回したが誰もチョコには気付かなかった。
今日	12:40	春日さん・松宮さんと生徒会室に入った宮野がチョコレートを発見。事件発覚。



もつともな指摘をしたのは、唯一容疑圏外の部外者であるサトウさんです。宮野さんが応えました。

「でも、スチールラックB——まあ本棚だね——が内側から塞いじやってるでしょ？ 背板せいたも付いてるタイプだから通り抜けは無理。

開くのはせいぜい二、三センチくらいかな。換気ぐらいにしか使えない……で、だからこそ、つい鍵を掛け忘れることが多いってわけ。昨日もね」

「うーん……ぎりぎりチョコを差し込むことはできそうだけど、テーブルには届きそうもないね」

「そゆこと。ちなみに、テーブルは電気ポットとかティーカップとか、休憩用の道具を置いてある、普通の木の机だよ」

目立つ疑問点が解消したところで、会長がピツと指を一本立てて注目を集めました。

「さて、この資料を基もとに密室の謎を検証していきましょう」

なんだか、いつになく本格的な雰囲気です。緊張してきました。そんな中で、

「あ、あのさ！」

不意に鹿野さんが声を上げました。みんなの視線が集まります。鹿野さんは、さっと集まった注目に怯ひるんだようでしたが、詰まる喉を鼓すように続けました。

「わ、わたし、思い付いたことがあるんだけど」

いつも活発で物怖じしない鹿野さんですが、場の空気からか上擦った声でした。しかしそんなに頑張った鹿野さんを、会長は片手を上げて制止します。

「ちよつと待って鹿野さん。みんなの意見は後で聴くとして、今日は順を追って、穴の無い推理を展開していきたいと思うの」

せつかくの密室なんだし……と、明らかに状況を楽しんでいます。そんな会長が、

「これは江戸川乱歩先生の本なんだけど」

と、取り出したるは江戸川乱歩の全集の一冊でした。仙波せんばさんが好きそうな本です。

「この本に載ってる『類別トリック集成』に拠れば、密室トリックは大別して三つに分けられるらしいわね。いわく――

カッコいち (1) 犯行時、犯人が室内にいなかったもの。

カッコに (2) 犯行時、犯人が室内にいたもの。

カッコさん (3) 犯行時、被害者が室内にいなかったもの」

「この場合の『犯行』は、チョコを生徒会室のテーブルに置くことですね、成田くんの確認に、会長はこつくり深くうなずきました。

「そう。密室殺人に勝るとも劣らない、禍々まがまがシヨッキングな出来事だったわ」

「そこまで……？」

「我々はこの惨劇の日を終生忘れることがないでしょう。まさに日本版、血のバレンタインです」

「佐々原さつきからおかしいよ佐々原」

囚人の讒言ざんげんは聞き流すとして。

「？ (3) の『被害者が室内にいなかったもの』ってなんですか？ 事件なのに被害者がいないんですか？」

真面目に聞いてメモまで取っていた春日さんがころんと首を傾げます。改めて見ると確かに大きなリボンが、ひよこんと揺れて可愛らしいです。その様を見て相好そうごうを崩している松宮さんは胃が反り返りそうになるほど気持ち悪いです。

春日さんの疑問には——午後の授業を完全に聞き流しながら密室トリックを勉強したという成果を見せるのが嬉しいのか——会長が張り切って答えます。

「それは、例えば、被害者が犯人に刺された後で部屋の中に逃げ込んで、犯人の追撃を避けるために自分で鍵を掛けてしまった場合——なんかね。そのまま部屋の中で死んじゃったら、事情を知らない人からは密室殺人に見えるってわけ」

「ああ、なるほど。でも……」

「そうね。今回の場合、チョコは自分では動けないわけだから、(3)は真つ先に除外していいでしょ」

これが殺人なら、被害者の死体をなんらかの理由・方法で密室に移動するというケースもあるかも知れませんが、今回の罪体はチョコレートです。唯一の開放点である窓Bからチョコを放り込むにしても、テーブルは死角になって上手く載るはずがありません。あるいは大がかりな仕掛けか道具が必要になると思われます。まず<sup>も</sup>以て論外と言ってでしょう。皆に異論が無いのを確認して、会長は話を巻き直します。

「というわけで、順番通り『(1) 犯行時、犯人が室内にいなかったもの』から検討しましょう」

「ちよつと待って」

今度は松宮さんが水を差しました。

「<sup>マケイスロウ</sup>負犬郎にチョコレートを贈る狂人が実在したとして、室内に入らずに、どうやってチョコを置くっていうのよ？」

言葉は理性的ですが声には角<sup>つ</sup>が生えています。松宮さんは、会長が嫌いと言うより、対抗意識を持っている節があります。

「行為が殺人なら、現象としては生存から死亡への変化だから、毒なり飛び道具なりで変

化させるのは可能でしょう。でも、今回は『無い状態』から『有る状態』へ変化させるってことで……それはもう奇跡よ」

まさか高校のバレンタインデーで奇跡の領域に踏み込むとは思いませんでした。しかし確かに、無から有を生み出すのは神様の特権事項です。

「この項目も無視していいんじゃない？」

「うん、わたしもそう思う！」

松宮さんの提案に鹿野さんも妙に勢いよく賛成しましたが、会長はまあ落ち着いて、と本に目を落としました。

「もちろん、書かれてるトリックのほとんどは使えないわ。

この項には【イ】<sup>から</sup>【へ】までの六つの小項目が挙げられてるけど、【ハ】【ニ】【ホ】は自殺ないし自滅に関する……つまり、被害対象に意志があることが前提のトリックだから除外。【へ】は動物の関与とか化学的バケがくな事故を想定しているのでこれも除外。

残るのは【イ】と【ロ】の二種別。【イ】は電流とか発射装置とかのカラクリ仕掛けを使って殺す方法で、【ロ】は部屋の外から飛び道具で殺す方法ね」

「わたしたちが入った時にはそんな装置見当たらなかったし、テーブルの位置的に投げ込むのも不可能でしょ」

松宮さんの指摘に、会長はチツチツと人差し指を振りました。

「確かに投げ入れるのは無理だけど、ほんの簡単な工夫で、テーブルの上に落とすことならできるわ」

「……どうやって？」

松宮さんの挑戦的な視線を始めに、会議室中の目が会長に集まります。会長は立ち上がって、先ほどホワイトボードに貼り付けた間取り図の上の方を指差しました。

指したのは、テーブルに隣接した位置にあるスチールラックAです。

「このスチールラックAは、天井との間に四〇センチくらいの隙間があるの。」

まず、その天辺、テーブル側の縁の辺りにチョコレートを置いておく。ギリギリ落ちないくらいのバランスだね」

なるほど……会長の考えが見えてきた気がします。

「その後で部屋を出て鍵を閉める。この時点で半密室ね。」

で、今度は外側に回って窓BからスチールラックBを揺らすの。ラックBはラックAと密着してるから、振動が伝わったチョコはバランスを失ってテーブルに落ちる——

どう？ これなら、窓Bの隙間だけでも実行可能よ」

まさにユダの窓が開いたのだわ、と結ぶ会長の説に——しばし沈黙が落ちます。みんな、

今の推理がどの程度妥当か咀嚼しているのでしょうか。

「さすがお姉様……見事な推理だよ！　もう要らないね、頭でつかちで陰険湿潤なチビッコ実姉とか要らないね！」

いえ、サトウさんだけは御来光でも拝んだような面持ちで会長に拍手を送っていました。それはさておき、さて。

ラックは地震に備えて固定されていますが、そう高級な物ではないのでスチール板は薄く、強めに叩けば振動が表面を伝わって、天板の上の物を落とすくらいはできるかも知れません。

だから、頭ごなしに否定できる仮説ではありません。ありませんが、

「うーん……でも、そうそう上手くいくかな？　テーブルに落ちるか不確定だし、首尾良く落ちたとしてもチョコ割れちゃわない？」

宮野さんの冷静な指摘ももつともです。ちなみに、実際のチョコレートは、外から触ってみる限り破損している様子はありません。

「それはほら、何度もしゃーサルして確実にテーブルに落ちる具合を試したのよ。それに、テーブルは汚れ易いから白いタオルをテーブルクロス代わりに敷いてあるでしょ。多少はクッションになるわ」

会長もその点は考えていたようです。しかし、それならそれで問題が出てきます。

大きな、問題です。

気付くと口を開いていました。

「リハーサルをできたとすれば、犯人は日常的に生徒会室に出入りできる役員だということになります」

「そうね」

「それと、この方法だと何かの弾みはずで落ちてしまう可能性が高いので、何日も前から仕掛けるのは危険が大きすぎます」

実際、宮野さんが発見した時点でチョコレートチョコレートの包みは全く汚れていなかったそうです。何日も放置すればホコリが積もっていたはずでしょう。

「そうになると、昨日の夕方に仕掛けた可能性が高くなりますが」

「ええ」

たぶんわたしの声は、必要以上に事務的でした。

「昨日の夕方、生徒会室で一人きりの時間があつたのは会長だけです」

今度こそ、沈黙だけでなく静寂が会議室を支配しました。

ややあつて。

「お、お姉様、まさか……！」

あわわわ……と、震えだしたのはサトウさんです。

「こんなケダモノに餌をやったの!？」

キャー！ と、すぐさま空を引き裂く裏拳うらげんを傍らの虜囚ろうしゆに放ちますが、成田くんは案外に冴えたスウェーバックでそれをかわして言い返しました。

「誰がケダモノだ！」

……あと、違うよ。会長は贈り主じゃない」

後半はやけにあつさりと、素っ気なく言いました。

しかし、先ほど書き出した時系列を見れば、一六時半にわたしたちが用を足しに出て、一六時四〇分に宮野さんがトイレから戻るまでの一〇分間——それだけが、生徒会室が一人きりになった時間です。

そしてその時間、部屋に残っていたのは——

「あら……このトリックだと、わたしが犯人になっちゃうのね」

そう。気付いていなかったのか、ぼかんと首を傾げる生徒会長その人です。

その事実を確認してか、松宮さんが「人はこれほどの感情を表情に込められるのか」と言わんばかりの嫌悪のしかめっ面を作りました。

「……なに？ これだけ大袈裟おおげさに騒いでおいて、自白が告白ってオチじゃあないでしょうね？」

「らしいっちゃらしいねえ。もうじき受験生だし、忙しくなる前に手頃なところで彼氏作つとくのもいいんじゃない？」

対照的にニヤニヤ笑っているが宮野さんで、その笑顔に据わった視線は会長の横顔から、なぜかわたしに向いたりしました。が。

会長は、のんびりと手刀てがたなを横に振りました。

「まさか。第一わたしは、毎年たまくんにチョコを渡してるのよ？」

「「えっ？」」

何人かの声が重なりました。当の成田くんはしようもなさそうに会長を見ています。

「そう言えば、今日も持ってきてたんだった」

言って会長は、足下に置いてあった鞆からチョコプレートを取り出しました。どこのコンビニエンスストアにでも売ってるような、凡々たる板チョコです。

そしてそのチョコを、ペッと成田くんの足下に放りました。

力無く床に落ちたチヨコの立てる、ベタツ……という寂しい音が、冬の空気にやけにヒリヒリと木霊こだましました。

会長の顔は背後の夕日で逆光になって朱黒く染まっていたましたが、朗らかな声音を紡ぐ口元だけが、ひたすらに鮮やかで艶つややかです。

「ほうら、拾いなさい。

たまくんがお母さん以外の人から初めてもらった、思い出のチヨコよ」

……………

室内の皆が反応に困る中、成田くんはゆっくりと周囲の面々を見回しました。死んだような目でした。それから、誰にもなく言いました。

「この女はかれこれ一〇年もの間、バレンタインデーたひの度に、こうやって地面に放られたチヨコを拾う僕を見て喜んできたんだ」

「うふふ。最初に渡した時なんて——幼稚園の頃だったかしら——、犬のように這いつくばってチヨコを拾った後、『ミサちゃんありがとー』って地面を駆け回って喜んでたわよね。

どう？ その足下のチョコを見て思い出した？ 初めてのバレンタインを」

会長は何事か思い出したのか、微かに赤らんだ頬に手を当てました。

「あの時、『女の子からチョコをもらうにはまず地面を舐めなきゃいけないんだぞ』って教えたらホントに地べたをペロって舐めて『にがいよー』って泣き出して……わたしはわたしで、人生で初めての『大爆笑』を経験させてもらったわけだけだ」

「僕が密室トリックを思い付いたら、真っ先にこの人の殺害に行使しているよ……！」

確かな殺意に彩られた、成田くんの苦い声でした。土の味を知っている者の声でした。

「しかも、わざわざ賞味期限が二月一四日のチョコレートを探して買ってくるんだから質が悪いんだ……」

「だって、慈悲の心がいつまでも続くと思われたら気持ち悪いでしょ。たまくんはあくまで、『バレンタインチョコのプレゼント』という年中行事を楽しむための生肉ガジェットであることを自覚してもらわないと。

『当て馬』、『噛ませ犬』、『成田真一郎』——全て同じ意味の単語よ」

あるいは怖気おぞけを催すほどの外道を、これほど爽やかな笑顔で語れる人をわたしは他に知りません。そして、そんなことを言われても、ただ疲れた風に吐息しただけという摩擦ぶりを見せる男子高校生もまた他に知りません。

「た、質が悪いつてレベルじゃない……！」

鹿野さんが戦慄にうめいて顎の下の汗を拭う仕事をしていますが、おおむね同感です。

とはいえ、さすがに椅子に捕らわれた成田くんが犬のようにチヨコレートを拾えるはずもなく、わたしが席を立てて拾いました。なんとなく裏をあらため——本当に賞味期限が今日中なのか気になったのです——

「……………」

思わず、止まります。賞味期限の日付が201X.2.15になっていました。

今年は今日が賞味期限の物が見つからなかったのでしょうか？　そうかも知れません。

その可能性が高いでしょう。しかし、何かとアバウトな性格でありながら悪ふざけには全力なところのある会長にしては不手際です。

一日しか違わない——と見るべきか。

一日だろうと違う——と見るべきか。

判断しかねて会長の顔を盗み見ますが、いつもと変わったところのない真綿まわたの笑みを浮かべていて、その奥にあるものは一切うかがい得ることができません。

「……化け狸」

松宮さんのほとんど無音に近い呟きが、なぜかわたしの耳の中で力を持って膨らみまし

た。

「——さて。」

わたししか可能な者がいないとすると、残念ながらこの推理はボツね」

何事もなかったかのように自説を却下する会長です。会長が犯人でないという物理的な証拠は出なかつたのですが、今の成田くんとのやり取りを見た後では、文句を付ける者は一人もいませんでした。

かくして検証は次の段階に移ります。

「続いて『(2) 犯行時、犯人が室内にいたもの』について考えてみましょう。

これは【イ】<sup>から</sup>【ホ】の五つの小項目に分かれてる。けど、【ニ】は発見者と入れ違いに部屋を出る方法で、今回の場合はそもそも鍵の管理がしっかりしてるので使えない。

【ホ】は列車を対象にしたものだから考えない。

だから検討するのは【イ】【ロ】【ハ】の三パターンね。

まずは【イ】のドアのメカニズムを利用したトリックを考えてみましょう」

「ドアのメカニズム？」

サトウさんが人差し指を頬に当てて聞き返します。会長は浅くうなずきました。

「ええ、要は鍵ね。ドアを閉めてる仕組みがかんぬき門とかなら、隙間から糸かなんか通して引っ張って、外から錠を下ろしたり。

でも、生徒会室の鍵はそう新しくないけどそこそこ複雑な物だから、わたしたちみたいな高校生がピッキングの真似事をするのは難しそうかしら」

「一応、訊いておくけど」

「なあに？ 松宮さん」

「鍵の当番だった先生が、なんらかの理由でチョコを持ってきたってことはないの？」  
なるほど、それは盲点でした。年がら年中他人をたばかる方法を考えている松宮さんらしい、ねじくれた発想の転換です。

しかしそれには、宮野さんがすぐさま首を振りました。

「それはないんじゃない。今週の鍵当番は梁井やない先生だよ」

保健体育の梁井教諭はいわゆる堅物として知られている女性の先生で、チョコレート引き渡しの仲介をするようなイメージはありません。

先生から成田くんへ宛てたチョコレートという可能性は残りますが――

「なに、たまくん。梁井先生にまでちよっかいかけてたの？」

「先生にちよっかいをかけてメイド服着せたのは会長でしょ……」

珍しくも、会長の揶揄にカウンターを決める成田くんです。

文化祭の時、子ひつじの会で催した喫茶店で梁井先生がゴシックメイド姿を衆目にさらしたという話は冬休みを経た昨今でも語り種ぐさです。ほとんど化粧っ気がないせいで目立ちませんが、梁井先生は若く奇麗で、しかもプロポーシオン抜群の女性なのです。普段は反抗している生徒たちの間にさえ、隠れファンが多いと聞きます。

「面白いやそんなこともあったわねえ。あの人、ノースリーブなのが恥ずかしそうに体縮めてたけど、あれ、肉が寄って逆にやらしかったわよね」

会長の所感にうんうんと同意を返したのは宮野さんだけでした。

「まあ、そんな食べ頃な梁井先生だけど、あれで几帳面で何事も行き届いた人だからね。鍵の管理ミスもなさそうだし、鍵に関するトリックはひとまず考慮の外に置いていいんじゃないかな」

脱線に乗りつつ元の路線に戻すのは、さすが宮野さんです。会長はそうね、と手元の本に目を戻しました。

「ンじゃ、次の【ロ】に移りましょうか。

この項目は『実際より後に犯行があったと見せかける』。

殺人の場合は、被害者を殺して外に出た後、それ以上は誰も出てこられない状況で、部屋の中でまだ被害者が生きてるように見せかけるトリックのことね。窓から人影を見せたり、銃声を鳴らしたり。

今回の場合、犯行があったと思われる昨日の一七時二〇分より前にチョコをテーブルに置いて、なんらかの方法で他の人にはそれを気付かせなかった……となるのかしら？」

自分で言つて首をひねる会長です。副会長が欠席していたとはいえ四人がいた室内で、そんな方法があるのでしょうか？

しかしこれには、先ほどから発言権を熱望していた鹿野さんがパクリと食い付きました。まさしく猫まつしぐらです。

「はい！ はい！」

飛び上がらんばかりの挙手攻勢。ヘアピンで左右に避けたクセツ毛がピコピコしているような錯覚で、なんだかくすぐったくなります。それほど自信のある推理を持っているのでしょうか。

「はいっ、鹿野桃子さん」

「待っていたよ！ この瞬間をさ！」

会長の指名に答えて立ち上がった鹿野さんがずびしッ！ と力強く指差したのは――

「え？ 僕？」

そう、チョコレートを贈られた側がわのはずの成田くんです。

「そうさ！ 今回の事件の犯人は……成田後輩だったんだよ！」

「なっ……なんだって——!？」

衝撃的な断言に、サトウさんが驚愕の声を上げました。

「ど、どういうことなの？ 自分で自分にチョコを渡すなんて、いくらアホっ子動物の成田くんでもしないんじゃないかな？」

「ふッ……簡単なことだよサトウくん」

鹿野さんとサトウさんは、ソフトボールの時とプールの時に顔を合わせたきりだと思えますが——……今さらですがわたしたちの会ちは何をやっているんでしょう……？——妙に仲が良いです。何かしら波長が合うのでしょうか。

「動機はずばり『見栄』！」

自分が全く本命チョコレートをもらえない哀れな動物であることを粉飾するために、自分で自分にチョコを贈ったのさ。自分自身をサクラにした自作自演だね！

そして、自分はチョコをもらえる男なんだってみんなに知らせようと、密室事件へ見せかけた騒ぎを起こしたんだ。つまり、世にもミジメな『俺はモテる』アピールだったって

こと！」

「なるほど筋は通ひゃッ!?」

サトウさんが言い切れなかったのは、脇腹に成田くんの頭突きを受けたからです。

「誰がアホっ子動物だ。お前にだけは言われたくないぞ」

何やら「弱い」部分に入ってしまったのか脇腹を押さえて顔を赤くしているサトウさん  
を押しつけ、成田くんは椅子をボタンボタンやって鹿野さんに向き直りました。直接に反駁  
を始めます。

「名誉毀損ですよ桃子さん。第一、僕がどうやってチョコを仕込めるって言うんです？」

「簡単だって言ったろ。なぜならあんたが、昨日、生徒会室を出た最後の一人だからさ。

帰る直前、隠し持っていたチョコを素早くテーブルに置いて、他の人がしつかり確認す  
る時間を与えずに追い出せば犯行は成立する。

チョコを贈られた人間が犯人であるはずがない、たかだかバレンタインデーにそんなア  
ホ臭い自作自演をかます奴のいるはずがない——そんな先入観を利用した、単純にして恐  
ろしい計画犯罪だよ！」

「いや、そんな馬鹿な……」

あはは……と困った笑いを浮かべて、成田くんは部屋の中に視線を巡らせました。いっ

しよに鹿野さんの推論を笑い飛ばしてくれる同志を探そうとしたのでしよう。しかし。

「……ふう。子供の頃から知ってる子がここまで墮ちてるとか……引くわあ。想像以上に引くわあ……」

「悩みがあるなら相談乗るよ。先輩なんだからさ、頼つてよ。そうじゃないと……悲しいじゃない？」

「まあ小学生の頃から人との関わりに飢えてるような、病的なところはあつたわね……うん、今思うと、もう少し優しくしてあげれば良かったかも知れないわね」

「な、成田くん……そんなに欲しかったなら、言ってくれば男子部員に渡す用に用意したのを分けたのに……」

「バレンタインで自作自演とは、とんだピエロ野郎だね。Peッツッ！」  
同志など、味方など、この部屋の中にはただの一人もいませんでした。

次々にかけられる同情と軽蔑の言葉。成田くんは追い詰められた顔でわたしを見ました  
が——わたしはついと目をそらしてやりました。……今日は、いろいろな理由により厳しくいくのです。

「どうやら陪審員たちも、あんたの犯行に疑問の余地無しと見ているようだね。非モテ男子の哀愁を感じさせる事件だったよ……」

「ぬ、濡れ衣ですよ桃子さん！ て言うか、非モテとか言わないで下さい！」  
鹿野さんは——すっと目を細めました。

「へえ……だったたら、本命チョコの一つももらったって言うの？」

「……………いえ、無いですけど」

……そうです。成田くんは今年、クラス全員に配られるレベルの義理チョコ以外にチョコレートをもらっていません。

それをわたしは知っています。

今日の昼休みに、直接聞いたのですから——

\*

二月一四日。

時は遡って昼休み。生徒会室でチョコレートが発見されるちよつと前のことです。

わたしは四時限目の授業が終わるなり手提げの巾着袋を持って教室を出て、A組の教室に向かいました。成田くんや仙波さんのいるクラスです。

ちよつと教室から出てくる成田くんに行き会って、学食に行くと言うのを引っ張って第

四会議室に連れていきました。

子ひつじの会に使うのとは違う小さな部屋で、先生方や生徒会の関係者が少数数のミーティングに用いる場所です。貴重品どころか机とパイプ椅子くらいしか置いてない殺風景な部屋なので、日中は施錠もされていません。

「どうしたんだよ佐々原？」

説明しようとする<sup>かえ</sup>と却って意志を伝えられそうになかったので、「付いてきて下さい」とだけ言<sup>つ</sup>て連れてきた成田くんですが、会議室に入るとさすがに訊かれました。わたしは答えずに、

「……まずは座<sup>ま</sup>つて下さい」

「？ あ、うん……」

幅一メートルほどの長机を隔てて、向かい合う形で席に着きました。

成田くんのきよとんと無邪気な視線に<sup>きおく</sup>気後れめいたものを感じながら、ンツン……と喉を鳴らしました。わたしは落ち着かないと喉がこわばります。

「成田くんは今日、チョコレートをもらいましたか？」

だから、問う声は少しかすれていたかも知れません。

「え？ いや……樋口<sup>ひぐち</sup>がクラスの男子全員に配ったのをもらったくらいだけ……」

成田くんは質問の意味を計りかねたようでしたが、情けなさそうに答えてくれました。

樋口さんというのはA組の学級委員で、わたしも何度か顔を合わせたことがある物柔らかな人です。(余談ですが、程度を弁えた量なら食べ物を持ち込むことは禁止されていないので、チョコレート持参は校則違反には当たりません)

わたしは巾着袋を開け、中に入っていた物を机の上に載せました。

菓子専門店の小さなカートンに入った、四個入りのチョコレートです。ブラウンとホワイトがマーブル模様になったそのチョコレートを、成田くんは緊張したような顔でのぞき込みました。

「……これは？」

「チョコレートです」

「うん、それは判る」

「……いいですか、成田くん」

「ああ」

「バレンタインデーに女性から意中の男性にチョコレートを贈る習慣があるのは日本だけで、諸外国では男女を問わず、お世話になった人に様々な物をギフトする日だそうです。本来はお歳暮なのです」

「お歳暮はちよつと違わないかな」

「お中元なのです」

「もつと違わないかな」

「……ともかく」

「うん」

「これは、わたしから成田くんへの贈り物です」

回り道の末にそう告げることに成功した時のわたしがどういう顔をしていたのか、それを知る術は<sup>すべ</sup>ありません。

「その……いつも助けてくれて、ありがとうございます」

成田くんの方は、口を半開きにしてわたしとチョコレートを見比べていました。自分の身に何が起こったのか、全く解っていないようでした。

「えつと……地面を舐めろってこと？」

「なんでですか」

当時のわたしは、成田くんの抱えた世にも哀れなバレンタイン体験を知りませんでした。だから冷たく聞き返したのですが、今にして思えば、彼の臆病な子犬の如き警戒心もよく理解できます。

「や、ごめん……ちよつと嫌な思い出が……」

愛に怯える悲しき獣こと成田くんは、深呼吸した後で——笑ってくれました。

「僕こそ佐々原には助けられてばかりだと思うけど、でも……ありがとう。」

すごくうれしいよ」

バレンタインデーに初めて良い思い出ができそうだよ……と、今にも泣き出しそうな顔をするので、正直ちよつと引きました。

ちよつと引いて——とても込み上げました。

血の気で茹<sup>ゆ</sup>だる顔をうつむかせ、手だけを出して勧めます。

「あの、持ち帰るにはかさばりますし、良かったら食べちゃって下さい……」

あ、うん……とうなずいて、成田くんは紙カップに載ったチョコレートを一つ、つまみ上げました。

正視できないほど恥ずかしかったのに、でもどうしても気になって、上目遣いでその手の動きを追ってしまいます。

そこから。

なんだかおかしなことになりました。

わたしの視線に気付いた成田くんは、チョコレート置いて訊いてきたのです。

「これ、どこで買ったんだ？」

「？ ……それは、常々母が美味しいと言っているお店で売っている、冬の限定品です。品薄だとかで、わたしはまだ食べたことがないのですが……」

言ってから、しまったと思いました。自分で味も知らないような物を食べさせる女だと思われたでしょうか。

しかし、成田くんの反応はわたしの予想の斜め上でした。

「そっか。じゃあ、まずは佐々原が食べてみなよ」

笑顔で言って、チョコレートを紙カップごとこちらに差し出してきます。わたしはあわてて手を振りました。

「いえ、それは差し上げた物ですから……」

「でも、僕が食べるの熱心に見てたし。食べてみたいんだろ？」

反射的に「それはチョコレートが気になったのではなく成田くんが気になるんです」と言い返しそうになって、すんでのところで呑み込みました。

そうして一度呑み込んでしまった言葉の代わりは、そうそう吐き出せるものではありません。

せん。

わたしの沈黙を肯定と取ってか、成田くんはなおも勧めてきましたが、わたしはただ緩慢に首を振って拒否しました。成田くんはわたしを子供扱いしているフシがありますが、一人前の高校生として、一度他人に贈った物を返させるなどあつてはならないのです。

「佐々原が買ったんだから遠慮しなくてもいいのに」

しばらくそんな問答があつて、それから成田くんは、ふと静かな声を出しました。

「佐々原。雪山でさ、言ったよね」

雪山。真っ先に頭に浮かぶのは葉村千代はむらちちよさんのいたずらっぽい笑顔で、その背景の白一面はくいちめんの世界は横殴りの吹雪に塗り潰されました。そうして、成田くんがその吹雪の中に飛び込んだ時の、心臓を引き絞られるような感覚を思い出して肩がすくみました。

……でも、わたしの言ったこととはなんでしよう？

その漠然とした疑問は、すぐに答えを得ました。

「もっと乱暴にしてくれてもいい、って」

……確かに言いました。猛吹雪の中、危険だからと言って、わたしを残して仙波さんを探しに行く成田くんに言った言葉です。

成田くんがわたしを……大切に扱ってくれるのはうれしくなくもないのですが、もっと

——たとえば会長や松宮さんと接する時のように——気安く触れ合ってほしいと思うこともあります。頼ってほしいと思うこともあります。だから。

そういう意図で発した言葉だったのですが。

成田くんは後は何も言わず、チョコレートをわたしの目の前に突き出してきました。反射的に顔を引こうとして——あつ、と動きが止まります。

気付くと、机の下の足に圧力を感じました。と言ってもほんの爪先つまさき、親指の第一関節くらいです。他に可能性がないからというだけの理由で、成田くんに踏まれたのだと気付きました。

「っ……」

声は出ず、ただ足を引こうとしましたが動きませんでした。いえ、何も強く踏まれていたわけではありません。本当なら、本当に嫌だと思つたなら、簡単に引き抜けるくらいの力加減です。上履き越しですし痛みも全くありませんでした。ただ。

ひゅっ……と。

成田くんの圧を、つまり意志を直接に感じている足の指先から、力が抜けていきます。まるで、ピンセットでゆっくり筋肉を引き抜かれていくように。

あつと言う間に、背筋せすじの奥までふにゃふにゃになりました。

——あれがなんだったのか、頭の落ち着いた今でも解りません。成田くんにも解っていないなかったでしょう。犬の習性に似たような何かがあったような気がしますが、かなり早い段階で考えるのをやめました。

わたしが動けなくなつたのを見て、成田くんはただ一言分、口を開きました。子ひつじの会やあの雪山で見た、決めたことを強行する時の目でした。

「佐々原」

それは毎日のように聞いている声で、言葉で、わたしの名字でした。特別な意味など何もない、特別な響きなど何もない。ただ、成田くんの中のわたしを意味する言葉で、成田くんがわたしを呼ぶ言葉で。

名前を呼ぶ。

それは普段なら、複数の人がいる場所で一人を切り取り、引き抜くことです。でも、今この部屋にいるのはわたしと成田くんだけで、全くの無意味なはずです。それなのに……いえ、それだから。

もつと、引き抜かれてしまったのでしょうか。

わたしは観念して、目だけは明後日あさっての方へ逸らしながら顔を前に出しました。できるだけ大きく口を開くと、ちよつと間があつて、それからチョコレートが入ってきました。

芳香とともに転がり込んだ甘い塊を舌に載せて口中に引き取り、今度は素早く顔を引きます。わたしはあまり口が大きくないので含んだチョコレートを持って余しながら、せめてもの反発を込めて成田くんを睨みました。むむっと。

しかし成田くんは、意外な顔をしていました。ぽかんと、何かとても予想外のものを見てしまったかのように。

「……？」

わたしが目で問うと、成田くんは初めて見るくらいの優しい苦笑いを浮かべました。

「いや……手で受け取ると思ったから」

衝動的に突っ伏して、ひんやりした机に額を打ち付けました。

「お、おい、大丈夫か？」

後頭部に受け取る成田くんの声も遠く、わたしは一瞬で灼けるようになった顔が冷めるのを待ちました。失態です。二月にして今年最大ではないかと思える失態です。

——顔から心臓への冷却が終わる頃には、口の中のチョコレートも溶けてなくなっていました。

ようやく平常を取り戻した顔を上げると、成田くんはわくわくしたような顔でこちらを見ていました。そんなにわたしの錯乱が楽しかったのでしょうか。

「美味しかった？」

さすがに腹が立って、皮肉が口を突いて出ました。

「せっかくですが、全く味が解りませんでした」

「そうか」

成田くんはあっさり言っただけ――

「じゃあ、もう一個食べてみないと」

二つ目のチョコレートを、今度はわたしの口の前に差し出しました。自分の口角が情けなく震えるのが判りました。

ままならない唇を叱咤して、無理です絶対に無理です――と、そう拒否の言葉を紡ぐ前に。

再びきゅつと爪先つまさきを押されて、体中の血がぞくりとかき混ぜられます。

鎮静の努力がリセットされ、混乱しきったわたしの耳に。

成田くんの驚くほど落ち着いた――それでいて昂揚をにじませた――声音が、柔らかく鋭く、忍び込んできました。

「佐々原」

………わたしは。

眼前のチョコレートを冷ますように吐息して。

緩く開いた口に、その「甘い物」を迎え入れました。

………違います。

あれは——チョコレートを介して唇に感じた成田くんの指の力は、わたしが求めた「乱暴」ではありません。何がどう、と訊かれると説明できませんが、そういうことではないのです。

そういうことではないのに、わたしは、流されてしまいました。

——要するに、わたしが成田くんに贈ったはずのチョコレートは、なぜかその全てがわたしの口の中に消えてしまったのです。

「本末転倒」という四字熟語は、人類の長い歴史の中のこの瞬間のために作られたのではないでしょうか——そんな風に思えるほど、不毛極まりない出来事でした。

わたしがいちいち泣きそうになりながら食べている間、成田くんは頬杖を突いて楽しそ

うにわたしの顔を眺めていました。そうして食べ終わると、次のチョコレート差し出してくるのです。

睨んでみても顔を背けても、その抵抗さえも楽しんでいるようでした。幼さを残した眼差しに、わたしの水っぽい抵抗をはね除ける弾力を宿して。

どんなチョコレートを口に含むよりも幸せそうに。

時々……この人は、時々。

普段からは想像もできないくらい、意地悪になります。

たぶんわたしは、怒るべきだったのでしょう。あるいは悲しむべきだったのでしょう。バレンタインデーにチョコレートを贈って突っ返されたのですから、引っぱたく権利が発生したと言ってもいいでしょう。少なくとも、一般的なバレンタインデーの儀式に照らして、とんでもないイレギュラーが<sup>しゅつたい</sup>出<sup>しゅつ</sup>来<sup>たい</sup>したのは間違いありません。

でも、四つのチョコレートを食べ終えた時のわたしは、不思議と嫌な気分ではありませんでした。

それはきつと、あの昼休みひらの一時ときが「バレンタインデーの行事」ではなく、「佐々原三月と成田真一郎のいつになく乱暴な何か」だったからなのだと思います。

それは今日という日、わたしとあの人の間にだけ生まれたイベントで、そういう唯一なものには正常も異常もないのです。

自分が世間とずれているのは嫌と言うほど自覚しています。成田くんも、わたしとは違う方向性でおかしな人です。だから、わたしたちが二人で向かい合えば、おかしなことになるのは当たり前のことなのかも知れません。

今のわたしにはそういうおかしなことが、特別なことが、くすぐったくて、気恥ずかしくて……心地よいでしょう。

チョコレートの甘さにか、冬にしては暖かい日差しにか、そういうものに溶かされたように、最後の最後でわたしは微笑むことができました。舌に広がる甘みに溶けて、頬がふわりと緩みました。

その途端に成田くんは「あ、う……」と喉でうめいて目をそらしてしまったのですから、失礼な話です。

それはそれとして。

わたしがチョコレートを食べ終えたことで、一時的な昂奮から冷めたらしい成田くんは一転「な、なんかごめん……」などと腰の抜けた謝罪をしてきました。

イラツと来たわたしが、昼休みの残り時間を成田くんへのお説教に費やしたことは言うまでもありません——

\*

——さて。

わたしがチョコレートを贈ってそのまま食べさせられたバレンタイン奇譚はどうでもいいのです。今は密室チョコレートの贈り主を特定するのが先決なのです。

脳裏の回想から我に返って、放課後の会議室。鹿野さんの打ち上げた「非モテ成田くんの自作自演説」によって、探偵小説のラスト数ページの犯人さながらに絶体絶命の成田くんです。

しかし、鉄壁無双かと思われた鹿野さんの推理も、思わぬ一穴いっけつを抱えていました。

「ああ、でも無理なんじゃないかな。だって成田くん昨日、バッグを教室に忘れてきてそのまま仕事してたじゃん。

このチョコけつこう大きいし、制服のポケットには隠し持てないよ」

宮野さんの記憶力が、その蟻の一穴をあっさり突き崩しました。生徒会の仕事をしなが

ら隠し持つことができなければ、鹿野さんの仮説は不可能になります。

「ああー、そう言えばそうだったわねー。すっかり忘れてたわー」

「……絶対覚えてたるサキ姉……」

先ほどからの仕打ちのつるべ打ちに、成田くんはそろそろ会長に対する敬語が保てなくなつてたりしましたが。

それよりもわたしは、

「なんだ残念。じゃあ、せっかくのわたしの推理もアウトだね」

と、あれほど強力に自説を押し込んだ鹿野さんがやけにあっさり退いたのが、少し気になりました。

「——他に意見も出ないようだし、いよいよ最後の小項目に入りましょう。」

【ハ】『実際より前に犯行があったと見せかける』。これはずばり、発見者がすなわち犯人というパターンよ。

殺人事件で言えば、睡眠薬か何かで意識を奪った被害者を密室の中に放置して、ドアを開けて死体を発見するふりをしながら早業はやわざで殺してしまうというトリックね。

今回の場合は、チョコレートを発見するタイミングが、実は設置するタイミングだった、

ということになるかしら」

「その場合は、容疑者が確定的に絞られるね」

会長の解説を聞いて、宮野さんは面白そうに自分、そして二人の下級生を順番に指で追いました。

「あたしか、春日さんか、松宮さんか。」

実際にチョコを発見したのはあたしだけど、入るなり預かり物の入ったスチールラックDを開けてたからね。あたしに気付かれないようにチョコを置くのはそれほど難しくないと  
思う」

早業殺人ならぬ早業バレンタインです。この方法は最も単純であるためか、実行のヴィジョンが明確に頭に浮かびました。

「なるほど……そっか。そういうことだったんだね」

と、胸の中で卵を暖めているかのように優しい声を出したのは、

「この事件の犯人は、楓ちゃんだったんだね」

なぜか上気してうっとりと目を潤ませている春日さんでした。

「……いや春日さん、なんでそうなるの？」

「ふふふ、楓ちゃん可愛い」

「ええと……」

親友に汚辱的な嫌疑を課せられた松宮さんは、春日さんの額に手を当てて熱を診みたようでした。

「どういうことですか、春日さん？」

「うん佐々原さん。判ってみれば簡単なことだったの。あたしたちが考えるべきは、むつかしい理屈じゃなくて、チョコを贈った女の子の気持ちだったんだよ」

女の子の、気持ち……？

訝いぶかしげな視線が春日さんに集まります。わたしの隣の鹿野さんも、唐突な話に絶句していました。松宮さんがだけが「春日さん、少し抑えて……」と肩を揺すっていました。が、何やら暴走モードに入った春日さんは止まりません。一度決めると周りを無視して疾走するところは、ある意味で成田くんに似ているかも知れません。

「そもそも、成田くんチョコを渡すのに、どうしてこんな回りくどいことをしなきゃいけないの？」

その理由は……『恥じらい』だと思うの！

恥じらい……？ 松宮さんが……？

「楓ちゃんは成田くんのこと好きなのに、つい意地になって冷たいこと言っちゃうでしょ」

「意地も何も、真一郎の顔を見ると天然にして自然に呼気は冷え舌は研がれ、忽然として胸にわき上がる正義の心のままに天魔覆滅を期した呪言が口を突くというだけなんだ」

「僕はただだけ邪悪な存在なんだよ……？」

今日何度目になるか知れない成田くんの力ない抗議は、当然の如く無視されました。心優しい春日さんにすら無視されました。彼女は今、自説の開陳に忙しいのです。

「そんな楓ちゃんは、せっかくのバレンタインデーにも素直にチョコを渡すことができなかったの。でも、胸からあふれる気持ちを押しさえきれずに、こういう方法で贈るしかなかったんだよ。」

つまり、チョコの贈り主が自分だと判ってもらえなくてもいい。ただ純粹にチョコを贈りたかったという無償の愛……それがこの事件の真相だったの。だって、他にこんなことをする必要のあった人はいないでしょ？」

そんな風にキラキラ光る瞳で言い切られると、なんとも否定しづらくはあります。しかし。

当の松宮さんが、春日さんの目の前で指を二本立てて見せました。

「……春日さん。残念ながら、その説には二つ問題があるわ。」

第一に、わたしは真一郎に対して……」

言葉を切った松宮さんの視線が一瞬だけ、椅子に縛られたままきよんとしている成田くんの視線と交わされた気がしました。

「忌々しいいまいまような義理はあっても、好意はない」

断言した松宮さんも断言された成田くんも平気な顔をしています。たぶん、二人にとってはそれが当たり前の関係で、そういう友達なのでしょう。

ほっとしたような、何やらうらやましいようなわたしを余所よそに、松宮さんの否定は続きます。

「もう一つ、わたしはあの時、あの大きなチョコを隠せるような物を持っていなかった」  
「あ……………」

これには春日さんの絶好調も急ブレーキです。制服だけでチョコレートを隠し持てないことは、先ほど確認したばかりです。女子制服でもそれは変わりません。

「ちなみにあたしも手ぶらだったよ」

宮野さんも宣言して、春日さんを見ます。

「そう言えば春日さんは、文化祭の衣装を回収するために大きな袋を持ってきてたよね」

「……………」

——条件は全てクリアされました。

そう。密室の検証も大詰めになって、最後に残った容疑者は春日さんだったのです。

室内の全員の視線が春日さんに突き刺さり、嫌疑の平衡してしまった本人は茫然自失の態です。

「長い検証だったけど、ようやく犯人が明らかになったわね……」

そして——この法廷の主宰たる生徒会長がゆらりと立ち上がり、ピッと伸ばした人差し指を春日さんに突き付けました。

「春日友達さん——混乱の限りを尽くしたこの密室バレンタイン事件……」

**犯人はあなたよッ!!**

恋愛探偵一転、犯人に擬ぎされてしまった春日さんはガタンッ！ とけたたましく立ち上がりました。

「そ、そんな会長さん……何かの間違いです！」

「わたしが言ってるんじゃないわ。推理小説の泰斗たうと・江戸川乱歩先生の遺風が春日さんを示しているのよ！」

「江戸川乱歩先生が!?!」

抗うにはあまりに大きな名前に血の気を引かせ、春日さんはふらつとよろけて松宮さんに寄りかかりました。自分を抱き留めてくれた親友の顔を見上げ、訊ききます。

「……コナンくんのじっちゃんだっけ？」

「なんかもうオールレンジに間違ってるわ春日さん」

松宮さんは案外に冷静です。

宮野さんが肩をすくめて、人の悪い半眼を成田くんに向けました。

「しっかし、まさか春日さんが犯人だったとはねえ。成田後輩も隅に置けないと言みさかいうか見境みさかいないって言うか……」

「え？ 僕のどこが見境ないって言うん——」

「ち、違います！」

わけの解らない反論を始めた成田くんを遮って、春日さんが再び立ち上がりました。きゅつと、ミカンの固さに握り込んだ拳を胸に当て、精一杯の意志を込めた言葉を吐き出します。

「あの……成田くんは楓ちゃんのカレだし、あんまり男の人って感じしなくて、そういう対象として見たことなかったし……だから——」

成田くんをひたと見据えると、勢いよく頭を下げました。

「だからごめんさい！ あたし、成田くんとはお付き合いできませんッ!!」

「あれ？ なんかないけどフラれた……」

実害は無いのになんかショックだ……と肩を落とす成田くんの姿は控えめに言っても愉快痛快で、ツボに入ったらしい会長が口元を押さえて肩を震わせているのも納得の極みです。

内心では会長同様に嗤笑ししょうの大盛りであろう松宮さんは、そつと春日さんの肩に手を置いて優しい微笑を浮かべました。

「よく頑張ったわ春日さん。こういう勘違い男には、はつきりびしッと『お呼びじゃないんだよこの毒毒スライムのまとわり節介偏執狂野郎がッ!』と意志表明しないと理解できないのよ」

「ごめんね……ごめんね成田くん。お友達としては好きだよ」

「だからなんで僕が告白してフラれた態ていになっただよ!？」

なんですか成田くん。まさか、バレンタインデーにもらったチョコレートを贈り主へ無理矢理食べさせる男子がフラれない世界があるとでも思っているんですか。

——とはいえ、純真で人一倍他人に気を遣う春日さんがこうもはつきり交際を断ことわったのです。いい加減な気持ちとは思えません。あの様子では松宮さんを装ってチョコレートを

贈ったという風でもありません。

こうして、最後に残った容疑者は日頃の人徳に裏打ちされた誠意を担保に、その疑いを逃れました。

まこと慎むべきは普段の行いです。

そうですね、成田くん。

かくして。

『類別トリック集成』に基づいた密室トリック説明は、果<sup>は</sup>無<sup>か</sup>くも暗礁に乗り上げてしまったのです。

会長は手の中の本をぺららとめくりながら、悩ましげに吐息しました。

「ううん……これさえあれば、あつと言う間に解決できると思ったのに……」

「そう甘くはないってことだねえ」

物憂げにうそぶく宮野さんが持つ、ハート型のチョコレート。その贈り主はいまだ謎めきの紗<sup>しや</sup>の向こうではにかんでいます。

意見はいろいろ出しましたが、物理的には可能な方法でも状況的・心情的に無理があるなど、なかなか難儀です。

……もしかすると、今日集まった中に犯人はいないのでしょ  
うか？ だとすると推理シ  
ョー破綻です。

一方、

「……今さらですけど、僕が拘束されてた意味って全然ないですよ  
ね？」

「あ？ 飼猫は、いたずらな繁殖を防ぐために家飼いえがいするか去勢するかに決まっ  
ているんだよ」

ようやく縄目を解かれた成田くんが本当に今さらの抗議をして、サトウ  
さんに道理を説かれていました。

しかし、そんな成田くんにも慈悲を垂れる人はいます。

「まあでも……さつきは悪かったね」

いつの間にか立ち上がり、気恥ずかしそうに成田くんの前に立った鹿野  
桃子さんです。

成田くんの自作自演を疑った件での謝罪でしょう。あまりにも強力すぎる  
状況証拠（＝成田くんはモテない）があったとはいえ、濡れ衣を着せたこと  
には変わりありません。

「あなたがモテないという確定的エビデンスが巧みなミスディレクシ  
ョンとなって、正しい推理を誤ってしまったのだよ」

「……全然謝る気ないですよね？」

「いやいやいや、違<sup>ちが</sup>くてさ」

そうして鹿野さんは、ジャージのポケットから何か棒状の物を取り出しました。

見ると、銀紙で包装された、延べ棒状の何かでした。断面が台形になるような、よくお金のアイコンに使われる、金の延べ棒の形です。しかも大きいです。厚さが一センチくらいあります。

「それは？」

「チョコ。あげるよ」

「え？ 僕にですか？」

意外そうに聞き返す成田くんは、その延べ棒チョコレートでおでこを叩かれました。あの体積のチョコレートなので、それなりに痛そうです。

「調子に乗ンない。ホントは自分のおやつにするために作ったんだからさ」

成田くんは目を丸くしました。

「作った？ 手作り？」

「そ」

「桃子さんて、お菓子作れたりする人なんですか？」

「これでも家庭科は得意なだけ」

鹿野さんはふふんと胸を張りましたが、くすぐられたように声の底が揺れていました。

「この季節は業務用のブロックチョコが特売になってたりするからね。昨日、部活の後で後輩たちがチョコ買いに行くって言うから便乗して一念発起したんだ。

一度でいいから、ザ・金の延べ棒みたいなチョコを自作してみたかったから」

なるほど。意中の男子に贈るにはスパルタンすぎる形だと思いましたが、自分で食べるつもりだったというのなら解ります。確かに金の延べ棒は、ちよつと、ワクワクします。

「でもこれ……」

成田くんが言葉を濁したのは、そのチョコレートがいかにも食べづらそうに見えたからで、でも、せつかくもらう物に文句わけを付けるのもなんだと思っただけだろうか。

鹿野さんはそれを察した上で笑ったようでした。

「うん。作ってみたらすごく食べにくそうだったから、誰かに押し付けようかと思っただけだったんだ」

「……厄介払いじゃないですか……」

うめく成田くんは「食べ物で粗末にしちゃいけないよ」と言いつけて彼の手にチョコレートを突っ込み、鹿野さんはわたしの隣の席に戻ってきました。

そうして、わたしに向かって意味ありげな視線を向けてきます。

「……で、あの子はどう考えるんだろうね？」

気のせいかな、鹿野さんの猫っぼい瞳の中に、挑むような何かを感じました。

——そう、鹿野さんは知っています。あの人のことを。御自身の相談を解決する際に会って、話して、知っています。

この混沌とした密室バレンタイン事件に一刀両断の解答を下しうる、子ひつじの会の秘ひ奥義おうぎ。隣室のコタツで丸くなる小柄な隠者。

わたしたちには。

この事件には。

まだ、仙波せんばさんが残されています。

結論を出す前に一時休憩するということになり、みんながトイレに行ったり改めて考えを見直している中、わたしは部屋の隅の扉から隣の部屋に移りました。

成田くんといっしょに行こうかとも思いましたが、今回は問題が問題です。ただでさえ成田くんを疎んじているあの人、成田くんにチョコレートを贈った人を教えたがるとは

思えません。

それに……成田くんも、なんとなく気まずいのではないかと、思いました。

だからわたしは、一人でこの部屋に來ました。

部室棟資料室。

文化系の部活で「当面要らないけど捨てるのはなんか怖い」物品を保存しておくための部屋で、資料室というよりは物置に近い有り様さまになっています。

乱雑な物品があふれかえり手狭な部屋の片隅に、この冬はなぜか小さなコタツが鎮座していました。

そして、そのコタツに防御態勢のカタツムリのように埋もれて、わずかに露出した頭と手を使って本を読んでいるのが――

「仙波さん」

「ん……」

わたしの呼び声に返ってきたのは、物憂げな撥音はっおん一つでした。しかしこれさえも望外の反応で、もし話しかけたのが成田くんだったのなら世にも希まれな「純一〇〇%の完璧な無視」という事象を観測することができたでしょう。

小柄で痩せ形の体に、ボサボサ髪の毛の頭を乗つけたこの人は仙波明希あきさん。成田くんのク

ラスメートで、わたしとも何かと縁のある……それ以上の関係性をどう表現すべきか迷う相手です。友達と呼んでしまっているのか自信がなく、かと言ってただの知人と呼ぶのは寂しすぎる。そんな、彼女。

「仙波さん、今日も聞こえていたと思います」

わたしが言う内にも、隣の会議室での話し声が聞こえてきます。

『あ、美味しい……』

『そうだろ？ 家の父さん、一時期は板前してたらしくてさ。カエルの子はカエルってやつかね』

『板前はあんまり関係無いような……でも正直、見直しました』

『……見損なってたんかい』

構造上の欠陥か偶然の反響か、壁越しとは思えないくらいにクリアに隣の会議室の会話が聞こえてくるのです。今のは成田さんと鹿野さんの会話で、どうやら成田くんはもらったチョコレートを早速食べているようです。昼休みに昼食を食べる時間がなかったので、お腹が空いていたのかも知れません。

わたしは、わたしの持ってきたチョコレートを食べたので平気です。

……

……そうですか。成田くんはわたしのチョコレートはわたしに食べさせて、鹿野さんのチョコレートは自分で食べるんですか。よく解りました。

「……で？」

「はッ」

いつの間にか虚空を見つめて目を細めていたわたしは、仙波さんの声で我に返りました。見ると仙波さんは読んでいた本を閉じ、愛用のキノコ形クッションを枕代わりに、仰向けになってわたしを見上げています。産着に包まれた赤ちゃんを連想してしまつて、ちょっと和なごみました。

「事件なのです。力を貸して下さい」

「嫌。めんどくさい」

寒いせいなのか不機嫌なのか、それとも問題が成田くん絡みだからなのか、いつにも増して素っ気ない仙波さんです。眼鏡の向こう側の瞳は、さながら「眠たげ」という言葉の標本で、意気の欠片もありません。

しかし、この謎はなんとしても解かねばなりません。生徒会室のセキュリティにも関わる問題です。

こうなったら——そう。

わたしも成田くんに倣って、ちょっと乱暴になってみましょう。

わたしは無言でコタツに近付きました。そうして、ぺたん膝を突き、間近で仙波さんの顔を見下ろします。

「？ な、なに……？」

「失礼します」

いぶかる仙波さんをひとまず無視して、仙波さんを後ろから抱きかかえるような体勢でコタツに潜り込みます。放課後からずっと入っていたであろう仙波さんの体はぬっくりと熱を帯びていて、暖房の無い会議室で冷え切っていたわたしの体には熱いくらいでした。

「っ!? 急に何……？」

いきなり冷たい体に密着されて、仙波さんはいつになく甲高い声を上げました。

もももどと脱出を試みますが、狭いコタツです。仙波さんとわたしの体だけでぎゅうぎゅうで、わたしの協力がなければ離脱どころか身じろぎの一つもできません。

ばたばたと暴れる仙波さんの脚にわたしの脚を絡ませて動きを封じると、仙波さんは諦めたように脱力しました。こうしてみると、女のわたしでもちよつと信じられないくらい細い脚です。

女子同士とはいえ、はしたないことをしているとと思われるでしょう。ですが、わたしだ

って仙波さん以外の人にはできません。母にだって無理です。何度か相部屋で泊まったりお風呂で背中を流し合ったりした仙波さんだからこそ、こんな大胆な手段に出られるのです。

決して、仙波さんはわたしが抱き締めるのにジャストサイズだから自然の衝動としてこうしたくなる、というわけではありません。

仙波さんのふわふわした髪に鼻先をくすぐられながら、告げます。

「わたしの話を聞いてくれたら放してあげますよ」

「段々ただの脅迫になってきたわね……」

仙波さんは苦々しくうめくと——脅迫とは心外です——、溜息に乗せて譲歩の声を聞かせてくれました。

「……何が聞きたいの？」

仙波さんの記憶力は卓絶していますが、念のため改めて事件の概要を話し、生徒会室の

位置図や関係者の行動の時系列をまとめたノートをコタツの上に広げました。「いったい犯人は誰で、どんなトリックを使ったのでしょうか？」

仙波さんとのドッキングを解除したわたしは、コタツの対面に着いて——いつもは成田くんが座りたがる位置です——尋ねました。

仙波さんは興味なさげにコタツの上の資料を眺めましたが、ほとんど間を置かずに呟きました。

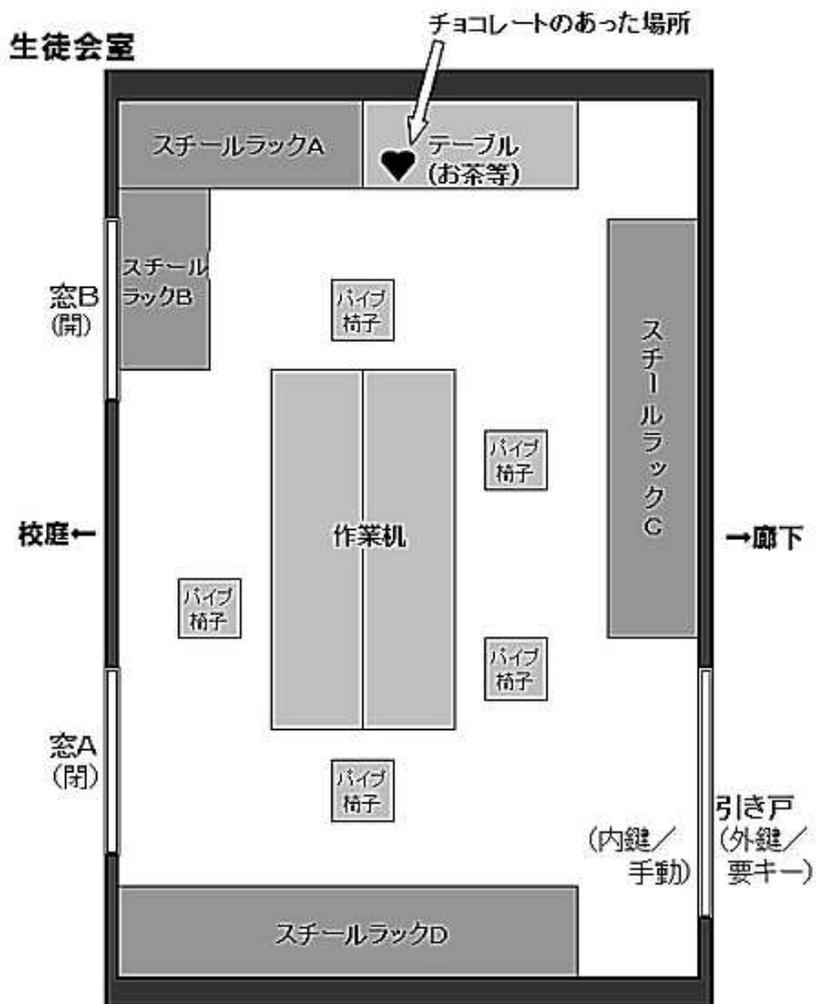
「どうでもいい」

「それは……仙波さんにとっては興味のない問題かも知れませんが」

ふるふると、仙波さんは首を横に振りました。

### 時系列

日にち	時間	出来事
昨日	16:00	役員たち(会長、宮野さん、成田くん、佐々原)、庶務に励む。
	16:30	成田くんと佐々原、用事があって職員室へ。宮野さんはトイレへ。
	16:40	宮野さん、戻る。
	17:00	成田くんと佐々原、戻る。
	17:05	窓Aから陸上部の休憩中の鹿野桃子さんが声をかけ、中に入って紅茶を飲んでいく。
	17:10	鹿野さん、部活動に戻る。
今日	12:40	春日さん・松宮さんと生徒会室に入った宮野がチョコレートを発見。事件発覚。



「それはその通りだけど、違う。」

この場合、トリックだなんだはどうでもいい——考える意味がない」

？ どういうことでしょう。

「でも仙波さん、トリックを解明しないと犯人が——」

「それよ。そもそも、『密室を破ること』<sup>イコール</sup>『犯人の解明』という図式で考えるのがおかしいの」

一見して無関心に見えるのに、仙波さんの返事は驚くほどに素早いものです。わたしは必死になって、せめて会話が成立するように追い掛けました。

「でも、密室トリックの仕組みが解ったら、それを実行できた人が犯人だと判ります」

「理屈の通るトリックを思い付いたとして、それが正解だと証明するのは簡単なことじゃない。あなたたちは捜査員でも探偵でもなんでもない、ただの高校生なのよ。動かぬ証拠となる痕跡を見つけられる可能性なんて絶望的でしょう。」

そしてそれができない内は、どんなに説得力のある仮説でも事実としては扱えないし、当然、犯人を特定する根拠にも使えない」

……そう言われてしまうと、一言もありません。

黙ってしまったわたしに構わず、仙波さんの言葉は一瀉千里<sup>いっしやせんり</sup>に走ります。

「大体、密室と言ったって、窓Bはわずかとはいえ開いていたわけだから、これだけでも可能性は収拾不能なレベルに膨れ上がってる。

なんなら、途中で曲がったスゴく長いマジックハンドを使って置いた……とかでもいいわけだから」

そういう突飛な道具を用意するのはナンセンスだと判断していましたが、物理的にないと否定することはできません。

「いい？ この場合、重要なのは匿名のチョコレートが『問題になるような場所』に置かれていたという事だけで、密室トリックの特定は必要がないの。着目すべきは結果であつて、それを導いた経過を考えるのは学者の仕事よ。

でもって、わたしたちは学者でも名探偵でもない」  
なんとということでしょう。

ここに今、我らが仙波さんによって密室トリック解明の放棄が宣言されました。武器よさらばです。

「でも、それではどうやって犯人を見つけなければ良いのでしょうか？」

「さつきも言ったように、証拠は見つけようがない。だから特定はできない。

その上で推定しようと思うなら」

仙波さんはわたしの目を見て、ようやく「本題」に入りました。

「繰り返しになるけれど、結果に注目するしかないでしょう」

「結果と言うと……」

抽象的な単語を頭の中でつまぐって、思考の指先に引っ掛かった答えらしきものを口にします。

「この事件で得をした人を見つけてるってことですか？」

「それが順当でしょうね」

満足げにうなずいてくれる仙波さんに、わたしは肺が安心と昂揚で膨れるのを感じました。

「でも仙波さん、バレンタイン・チョコレートを贈るメリットなんて、愛の告白か日頃の感謝を表すくらいしかないんじゃないでしょうか」

「当然、当たり前よ。だけど、匿名の時点でその両方が消滅する」

仙波さんはわたしの意見を半ば予想しながら話しているのです。打てば響くように答えが返ってきて、わたしも彼女の思考のテンポに引き込まれていきます。

「匿名だったのではなく、単に自分の名前を書き忘れただけ、とか」

「ない、とは言い切らない。だけど、半密室にチョコを置くような人間がそんなへまをす

る可能性は低いし、その可能性を探ると本格的に考える意味が失くなる」

そうなる——と考えて思い出すのは、純粹性善な春日さんが案出した松宮さん犯人説です。

「……自己満足、というのはどうでしょう？ 面と向かって告白するのは恥ずかしいけれど、気持ちを形にしたチョコレートを渡すことで、イベントに参加した思い出を作る、とか……」

正直わたしにはピンと来ない動機ですが、春日さんのようにリリカルで控えめな人格ならありうるのかも知れません。

しかし仙波さんはあっさり却下します。

「それは書き忘れより無理がある。なぜなら、密室にする意味がないどころか、現に今そうなってるように、犯人捜しが行われるかも知れないでしょ」

わたしは反射的に返していました。いわゆる閃きです。

「それが目的だったとしたら？ つまり、自分の力で告白に踏み切るのではなく、成田くんの方から探してもらい、見つかることで自動的に好意を示すんです。

会長や子ひつじの会のことを知っていれば、謎を解いて贈り主を見つけようとするのも予測できると思います」

「……なるほど」

予想外の意見だったのか、仙波さんはすぐには答えませんでした。引っ張り上げたぬいぐるみの腕を口元に当て、少し考えてから答えてくれます。

「犯人が『見つかって構わない』というつもりで匿名のチョコを贈った可能性は、考慮しておくべきかも知れない。

ただ、もし探させる意図があったなら手掛かりの残し方が消極的すぎるし、実際、手口から犯人を特定する方法は頓挫した」

確かに、あのチョコレートが示すのは、

1. 成田くん宛てであること。

2. 明らかに本命チョコレートであること。（ハート形で赤い包装紙で、決してお安くないサイズです。ひよつとしたら手作りかも知れません）

——の二点くらいでしょう。

密室にしてもいくつか可能な案は出たものの、物証は皆無で結局犯人には辿り着けませんでした。

「でもそうになると、今の時点で得をした人なんているのでしょうか？」

案の果てたわたしの問いに、仙波さんはぬいぐるみの腕を弄びながら、

「義理チョコとは、何か」

いかにも唐突なことを言いました。

わたしは戸惑いつつ、自分なりの認識を言葉にしました。

「あ……恋愛的な意味合いのない、普段お世話になっている人へ渡すチョコレートのこと、  
でしょうか」

「それはなぜ義理チョコと呼ばれるの？」

人生で自然に身についた一般常識を腑分けされる、この感覚。なんとなく、子供の頃、  
母に耳掃除をもらった感触を思い出します。

「本来は恋愛の対象に渡す——本命チョコレートが、日本のバレンタインデーの特徴だか  
ら……？」

「そう。お菓子会社の陰謀だろうとなんだだろうと、日本のバレンタインデーの文化は女性  
から特定の男性へチョコを贈る日、というのが起点になって発達した。

贈る相手を拡張した義理チョコはその派生だし、『義理チョコ』が生まれたから比較と  
して『本命チョコ』という言葉が発生したんでしょう」

仙波さんは言葉を切って、先ほどの問いを繰り返しました。

「——さて。」

義理チョコとは、何か？」

わたしは、流れのままに答えました。

「本命チョコではないチョコレート、ですか」

そして言い足しました。

「反対に本命チョコは、義理チョコではないチョコレートと定義できます」

仙波さんは満足げにぬいぐるみの腕におとがいを埋めました。

「わたしの好きな短編推理小説の中で、主人公のブラウン神父がこんなことを言う。賢い人は葉っぱを森へ隠す、隠すのが死体なら死体の山を築く——ってね」

どなたか存じませんが物騒なことを言う神父さんです。

「それを地で行けば、バレンタインチョコを隠すなら、よりらしいバレンタインチョコの中ということになる」

ようやく——ようやく、仙波さんの言わんとすることが理解できました。

「つまり、あのそれらしい本命チョコレートを提示することで、自分のチョコレートを相対的に義理チョコに見えるようにした、ということですか？」

「そう。つまり陽動ね。自分のチョコをいかにも見すばらしく見せるための。」

——つまり犯人は、自分が成田くんに渡すチョコを、なんとしても義理チョコであると認識させなければならなかった人、と考えられる」

……そんな理由があるのでしょいか？　ともかく、

「それが目的だとすると、犯人は成田くんチョコを渡した人物ということになりますね」

わたしは思い出しました。成田くんチョコを渡した人というところ——

「確か、樋口さんからもらったと」

「あれはクラスの子に一律に同じ物を配ってたから、変な偽装をしなくても義理チョコにしか見えない」

仙波さんも成田くんと同じクラスなので、配られるのを見ていたのでしょう。では樋口さんは除外です。

次はわたしがチョコを……食べさせられましたが、あれは番外編です。わたしはあれがバレンタインデーの行事だとは容赦しません。

「他には、会長の板チョコでしょうか……でもこれは」

「当然それも、比較対象を作るまでもなく、本命チョコだと思われる心配はない」

あれは最早、義理チョコと言うより鬼チョコです。成田くんも他意を期待したような様子はありませんでした。

しかし、そうなると……

「でも仙波さん、残る一人は、密室にチョコレートを置くことができません」

そう、彼女は昨日、生徒会室を訪れこそしましたが細工をする時間も隙もなく、部活動が終わった後は後輩の人たちとチョコレートを買いに行ったと言っていました。

生徒会室は校庭に面しているので、日中、窓からチョコレートを入れ込むのも不可能でしょう。目立ちすぎます。

会議室で密室を検証していた時にも、あの人だけは一切の嫌疑を向けられませんでした。仙波さんは密室トリックについては無視していいと言いましたが、明らかに不可能な人に疑いを掛けるのは問題でしょう。

仙波さんはちよつと答えずに、大きく仰け反って窓外の夕日を眺めたようでした。飾り気の無い眼鏡のレンズに、飴でも延ばしたように緋色の光が満ちます。

それからそのまま、眠たげに言葉をつむぎました。

「でもあの人は、紅茶を飲んでいった——チョコレートの置いてあったテーブルに近付いたわけよね？」

「はい。部活中に生徒会室で休憩していくことがよくあるので、もう自分でお茶を注いで飲んでいくのも当たり前になってます」

「だったら答えは簡単。チョコレートは多分、普通にテーブルの上に置いていたただけなのよ」

「?? どういう意味でしょう。」

「でも、帰る時に部屋の様子は確認しましたし、あんなに目立つ包装ならすぐに見つかるんじゃないでしょうか。赤と白のストライプですよ?」

「そう。実際に発見された昼間なら、真っ赤な包装紙はとても目立つ。でも昨日の夕方は、ギリギリするほどの夕焼けが部屋の中まで染めていた。」

「チョコを隠すならチョコの中、赤を隠すなら赤の中よ」

「あ……………」

生徒会室のテーブルには白いタオルが敷かれています。そして理科の授業で習ったように、全ての色の光を反射する白色は、夕日の光を浴びれば赤く染まります。派手な赤白ストライプの包装紙も赤一色に染まるわけです。

加えてあの平べったいチョコレートなら、タオルのしわに上手くまぎれさせれば、ちょっと眺めたくらいでは見逃してしまう程度には目立たなくなるでしょう。しかし白昼に見

れば白いタオルの上の赤い包装紙は著しく目立つので、忽然と出現したように見えたでしょう。

犯人が昨日も着込んでいたジャージの内側にチョコレートを隠し持っておけば、お茶を用意するふりをしてテーブルに置くくらいはできたのではないのでしょうか。

あまりにも単純すぎる、トリックとも言えないようなトリックですが、それだけに盲点でした。

「そして佐々原さんも言っていたように、密室にチョコレートが現れれば、あのかしましい生徒会長が集まりを催して犯人を捜そうとすることは簡単に予想できる。もしそうならなかった場合は適当にけしかければいい。

——その上で成田くんの自作自演説を打ち上げ、それが否定されることで謝罪する口実を得た。

かくして彼女は、成田くんへ『本命とは思われないように』手作りチョコレートを贈ることに成功した」

……そう言えば、会の開幕から自作自演説の発表を急いでいた節があります。自分以外の方が成田くんに疑いをかけてしまうと、償いのためにチョコレートを渡す口実を失ってしまうことになるからだったのでしょうか。

そしてあの人のチョコレートは、形は無骨ながらも手作りで味も良かったようです。手間とクオリティは確かに本命チョコのそれで、義理チョコに偽装する意味はあります。残る問題は、

「動機だけど——……」

そこまでスラスラと話していた仙波さんが、そこで初めて言葉を濁しました。

「……犯人が、あのゲス黒い虫のような生き物に好意を持つてるのはなんとなく察せられる……どの程度本気なのかは知らないけど。

でも、あの性格だから素直に渡すことはできず、こんな迂遠な方法を取った——というところかしら。まあ、普段からあれだけイジられてたら、真正面から渡すのに臆病になるということもあるでしょう」

この解釈は、春日さんが唱えた松宮さん犯人説の拡張版といったところでしょうか。

「結果として、犯人は自分の真意を悟られずに手作りチョコレートを渡し、しかも自分の調理スキルをアピールできた……と」

そこまでで、仙波さんの仮説は終わりのようでした。あくびめいた吐息を漏らし、コタツの上に突っ伏します。

「解つてると思うけど、これは『一応成立する解釈』ってだけよ。証拠も何もない。ただ、

『今の時点で利得のあつた者』が一人しかいないという話」

いつもの如く釘を刺す仙波さんです。実際、仙波さん自身も確定的な説だと思つてはいないのでしよう。行き詰まつた密室解明とは別のアプローチを示してみせた、ということなのだと思ひます。

しかし。

わたしは、今の仙波さんの仮説に、確信を感じていました。悟つた、と言つてもいいかも知れません。

——これが正解です。

そしてこの確信は、仙波さんには絶対、にたどり着けない境地です。

仙波さんは、犯人が普段から成田くんにかかわれてるから臆病になつたようなことを言つていました。

しかし、違います。その点をわたしは断定します。

なんととなれば、犯人は仙波さんのことを知つてゐるからです。しかも成田くんといつしよに会つたからです。だから。

本命チョコレートを成田くんに贈ればどうなるのか。それが見えてしまうから、今の距離感が保てなくなるのが判ってしまうから——臆病になったのです。先ほど、あえてわたしに仙波さんの意見を訊きに行くよう促したのも、臆病の裏返った挑戦だったのかも知れません。

なぜ、犯人ならぬ身でそこまで言い切れるのかと言えば。

わたしも、同じように言い訳を弄しながら、同じ相手にチョコレートを贈ったからです。結局わたしが食べさせられました。

さて。

少なくともわたしの中では犯人は特定され、事件は終局を迎えつつあります。

しかし問題はここから先です。わたしの確信したこの真相を、どう扱ったものでしょうか。

みんなの居る前で今の推測を口にするのははばかられます。成田くんなら、躊躇せず真相を明るみに出して人間関係を加速させていたかも知れません。仙波さんに意見を求めれば、もう放っておけばいいとも言われそうです。

しかしわたしは、成田くんでも仙波さんでもなく、佐々原三月なのです。

犯人が迷彩に迷彩を重ねた気持ちちは理解できません。それに……もし犯人が「見つかったも構わない」と思いながら事を起こしたのなら、わたしとしては……意地悪、したいところです。だから。

どうかして、『わるいこと』してみましょう。

## Part-B：仙波明希

……ようやく帰ってくれた。

二月一四日、夕方。

「ふう……」

馬鹿馬鹿しいような密室バレンタイン事件について意見を求めに来た佐々原さんが隣に

戻るのが見送り、わたしはコタツで温ぬくんだ息を毛玉のように吐き出した。

今日はただでさえ妹がクソふざけた格好で学校に忍び込んできて——お陰で予備の制服はしばらく当てにできない——不愉快だというのに、なんで選りにも選って成田真一郎にチョコをやった主を探らねばならないのか。

エサは付いているけど粘着マットの欠品したホイホイ的な物を掴まされた気分だと言えば判り易いだろうか。……いや判りづらいか。

この際だ。少し詳しく説明しよう。

わたしがなぜ成田真一郎を黒くて平べったい衛生害虫に例えるのかと言えば、それは奴の凶々しさに起因する。

今時の住宅地の家屋の中には、夏でも滅多に虫は入ってこない。蚊のようにミニマムな虫を除けば、例外はあの油で黒光りしてやたら素早いアレくらいだろう。カナブンやカブトムシは平気で捕まえられる妹なども、アレだけは苦手にしている。

しかし、仮に屋外でアレに遭遇しても、大して恐れることはない。無視するのも逃げるのも、あるいは殺すのさえ、さほど苦労はないのではないだろうか。スズメバチのように、人体にも通用する武器を備えた生き物ではないのだ。

アレの恐ろしさは、現代人が家族以外は侵入できないパーソナルスペースと定義した「部

屋の中」へ忽然と現れることにある。存在自体が奇襲なのだ。日常の桶狭間おけはざまなのだ。

人は目に見える恐怖には対応できる。備えられる。それだけの知恵があり技量がある。だが、安全だと信じていた空間の中で、突然に現れる無法者に対抗するには相当な心の修練を要する。

成田真一郎は、まさにそれだ。

平気で人の心のパーソナルスペースに入り込み、その部屋の中を無遠慮に眺め回し、時には勝手に模様替えしてしまう。土足ではないが裸足はだしで踏み歩いていく。

そういう奴だ。

成田くんは過去のある日、佐々原さんへささやかな自信を植え付けた。今も着々と、他人との交わりを諦めて停滞していた彼女を変容させていつている。

幼い松宮楓を頼まれてもないのに孤高の座から引き下ろし、憎まれた。

それだけでは終わらず、春日さんを助けて松宮さんを変えてしまった。

鹿野桃子先輩にも何か、強引に踏み込むことをしたようだ。

わたしに至っては物理的な話だ。この部屋の静寂と平穏を乱され、なぜか旅行する度に顔を合わせるようになった。

だから。

だから奴はゴキブリだ。どこにでもカサカサと入ってきて、臆病な住人を動揺させながら走り回る。

これで、誰にでもあの男の忌まわしさが伝わったのではないかと思う。

その忌まわしい悪性<sup>さが</sup>ゆえに、今日のような面倒な事件を引き起こすことになったのだから。いつも通りの無表情だったが、佐々原さんも相当に複雑な心境だったのではないだろうか。

……本当に面倒くさい連中だ。

そんな、我ながら余計なお世話なことを考えている間にも、隣室の話し合いは再開している。

反証の出なかった会長さんや春日さんを追及する流れの中、佐々原さんが出し抜けに突飛な発言をした。

『そのチョコレートは、本当に存在しているのでしょうか？』

………あの子は何を言い出すのだろう。

『は？ 常々、右だけ長い前髪が蠅とか捕食してそうだなあこの冷凍顔宇宙人とは思っ

てたけど、ついに頭がおかしくなったの？」

『何か言いましたか髪にラフレシアを付けた松宮さん……あ、すみません、よく見たら男子ウケしそうなあざと……もとい可憐なお花の髪飾りでした。魂からにじみ出た銀蠅を誘引する屍肉の臭いが錯覚をもたらしたようです』

『あ？ 後頭部からイカスミパスタ生やしたコケシが、ふざけた呪文を唱えるものね』

……成田くんが時々愚痴っているが、佐々原さんと松宮さんは本格的に仲が悪いらしい。性格の不一致と、その割りに「生き方」が妙に似てしまっていることが質の悪い同族嫌悪を引き起こしているらしい。

その後も、お経のように滑らかな罵言の応酬が続いた——こいつらは普段どんだけお互いを刺す言葉をストックしているんだ？——が、泣き出しそうな声で割って入った春日さんの懇願により没収試合になった。

かくて不毛な攻防は終結して。

改めて、佐々原さんの主張が始まる。

『コホン……』

いいですか皆さん。そもそも、このチョコレート存在は摂理に反しています』

『せ、摂理……？』

『そうです成田くん。』

このチョコレートは、どう見てもいわゆる「本命チョコ」です。「本命チョコ」とは、バレンタインデーにおいて男性への愛を告白するためのアイコンです。

しかし』

『しかし……？』

『先ほども満場一致の合意コンセンサスが得られたように——

成田くんは絶対的にモテません』

その佐々原さんの宣言に、

『おいおい佐々原……』

反応したのは成田くんの苦笑だけだった。他にはしわぶき一つない。あまりにも当然、当たり前前の話だからだろう。

『あ、あれ？ みんな……？』

なぜか戸惑いの声を上げる成田くん——まさかとは思うが女子とのソフトボールの試合で二打席連続バントをかます男がモテる可能性があるかとも思っているのか死ねばいいのに——は完全に無視されて、隣室には緊張の空気が満ちたようだった。

『ふん……新種の妖怪「能面剥はがれな子こさん」にしては的を射た指摘ね』

『た、確かにおかしいわ……』

何を望みに生きているのか知れないほどモテないまくんに本命チョコ……とんでもない矛盾よ』

『まったくだよ……こんな変態が本命チョコをもらうようなら世の中はおしまい、現世は闇に包まれ魔なる者が跋扈する暗黒の時代が来るよ』

『そういやそうね、なんで気付かなかったんだろう……？』

『うう、確かにリアリティ無さすぎだった……』

『あ、あの、みんな……さすがに成田くんが可哀想だよ。』

そ、それに、いくらほとばしるほどにモテなくなつて、成田くんには楓ちゃんがいるし！

ドンマイだよ！』

優しい言葉をかけてやるのは春日さんだけだ。その他の面子は状況の異様さに気付いて口々に驚嘆を表している。

『どうやら理解してもらえたようですね。この異常事態を』

『そうね。まさに神様仏様の摂理に逆らう事実だわ。』

わたしたちは、とんでもない思い違いをしていたのかもしれない』  
 会長さんの力強い同意に、他の連中も追従するのが伝わってくる。

『ちよ、ちよっと待って下さいよ！　いくらなんでも神の摂理に反しているは無いでしょ！　今、そこに、チヨコが存在するのが現実です！　科学的に考えて下さいよ！　科学的に！』

それに抵抗して、成田くんが屁理屈をわめき散らす。

『だ……第一、僕だってそんな、超常レベルにモテないわけじゃないですよ……たぶん』

『『『『『はっ、』』』』』』』』

春日さんを除く——と思う——六人の声が奇麗に唱和した。

それが何か霊的な儀式でもあったかのように、暗く重い気配が壁越しにすら感じ取れるほど膨れ上がり、そうして、それから。

惨劇が、始まった——

『え？　なあにたまくん、それ本気で言ってるの？　また地面舐める？　夢から醒めて現実が見えてくるわよ。』

落ち着いて、ちよっと胸に手を当ててごらんなさい。

小学生の頃、友達が転校して落ち込んだ挙げ句に部屋へ引き籠もって、ドッチボール抱えながらぐえぐえ泣いて登校拒否した事、忘れてないわよね？ でもって、近所の可愛いお姉さんにパンツ引っ張られてお尻丸出しになりながら学校まで引きずり出された事も覚えてるでしょ？

中学生の時、本棚の裏に隠してあったちよつとHなマンガをそのお姉さんに発見されて正座させられて、そのまま朗読された甘酸っぱい記憶は甦った？

高校生の夏の夜、お姉さんに狼藉を働いて横隔膜を強打され無様にのたうち回った事は記憶に新しいわよねえ？

ねえ。そんな男の子がモテると思うの？ バカなの？ 高校に入って女子と話す機会が増えて勘違いしちやつたの？』

『いやあ無理でしょ成田くんさー。どんな事象も、観測できなきや無いのといっしょよなんだよ。だからさあ、アンテナがバツキバキに折れてる君が「モテる」なんて主観を得ることとは不可能なわけだよ。』

あ、言われてる意味解らないでしょ？ だからダメなんだよ。ダメ男なんだよ』  
『変態のくせに人の姉に色目を使い、あまつさえお姉様にべったりだったり佐々原さんを侍はまらせたり、芳花ちゃんにもデレデレしたり……！ 汎太平洋無差別級の節操なしが人並み

にモテるなんて幻想が過ぎるよ！

春からはわたしがその獣欲を管理するからね！ 結局は永劫にモテないってことだよ色情狂！』

『意味不明なことを言わないでくれる真一郎。聞いてもいないのに「自分が一番真一郎を上手くおちよくれるんだ」ってゴリゴリとアピールしてくる細目女だとか、背後霊みたいにうっそりと憑いて回る後頭部の鬱陶しい尻尾しっぽ引っ張ったら電源切れのようなアンドロイド女だとかに囲まれてる、いかにも面倒くさそうな男に誰が惚れるって言うの？ 見るからに地雷でしょ？

と言うか、わたしをストーキングしてくれたこと忘れてないからね。犯罪だからね。わたしがあんたを社会的に抹殺するなんて簡単だってことをくれぐれも忘れないでよ。言うまでもなく、そんな潜在変質者がモテるわけないって自明でしょ。自おのずから明らかでしょ』

『成田くん、さつきはごめんね。でも、楓ちゃんという人がいながら他の子——し、しかもあたしなんか……——に目移りするのはやっぱりダメだよ。そりゃあ、楓ちゃんは美人だし清楚だし知性的だしで、釣り合わないかもって気持ちも解るけども、成田くんになつてちゃんと良いところがあるんだから。

例えば、えくと……

……う、ううん、違うよ。思い付かないとかじゃないよ！ ホントだよ！

え、えと……あ！ ほら！ 文化祭のあの衣装はすごく似合ってたし、一生懸命走ってた姿も……よ、良かったと思うよ！ 自然にあの衣装を着こなすなんて、よっぽど普段から周りの人に命令されていのように使われて隷従し慣れてるってことだよ。とつても立派だと思う！』

『……大体さ、先輩に対する敬意でもんが足りてないよね。失礼だよ。それって、ナマイキって言んじゃないの？ ちよつと木登りしたら怒鳴ってくるし、人が気にしてる日焼け後後を三毛とか言ってくるし……メイドの格好かっこしてまでおちよくってくるのはなんなんだよ!? て言うか、わたしの恥ずかしい写真撮わって脅迫おどしてくるなんてサイテー！ 男のクズだ！ 言つとくけど、あんな悪わるフザケを許して、しかも先輩として構かまって上げられるのなんて人格者のわたしくらいなんだからな！

よ……要するに、あんたが全部悪いんだ！ ばーか！ ばーか！』

『成田くん。言うまでもないことばかりではあるんですが――』

汗あせも疹あせもができて大変だと言つている女子に「見たことないですよ」とか言う男子がモテる

と思っっているんですか？ どういうところに出来やすいかとか考えないんですか？

アルバイトに行ったお屋敷で、真夜中に中学生のお嬢さんの部屋に押しかけて話し込むような人がモテると思っっているんですか？

メイド服を着込んでこそと学校中を練り歩き、行く先々で女の子にへいこらしてた男子高校生のモテる可能性があるとしても？

雪山のロッジでやっぱり中学生の、しかも寝込んでいる女の子の部屋に入り込み、おかゆをフーフーして食べさせた挙げ句にその事実を隠し立てして、廊下に正座してそれを白状させられるような人がモテると信じられる根拠は一体なんですか？ と言うかなんてそんなに女子中学生の部屋に興味津々なんですか？』

それは。

滅多刺しだった。

かの『オリエンタル急行殺人事件』もかくやという滅多刺しだった。

言葉のナイフが成田くんの腹を裂き、その内臓——無節操と強欲とお節介と自分勝手と考えなしと厚かましさと物好きと色々——が部屋中にぶちまけられるのが、確かにくつきり目に浮かぶ。

どうも隣室の面々は、成田くんに対してよほど溜まつていたらしい。野獣死すべしである。

『……………』

その凶行が過ぎ去った後、成田くんの声はずいぶんと下の方から聞こえてきた。

『…………ごめんなさいでした』

壁越しにすら伝わってくる、冬の雨に濡れさらばえてボロ雑巾のようになった子犬の、隣れに震える鳴き声だった。

『もう…………もう、勘弁して下さい…………調子に乗ってました…………』

僕は…………モテない男でした…………』

多分——うづくまつて慈悲を請うているのだろう。人の体には、言葉でへし折れる骨が五本くらいある。

『ちゅんませんと言え』

『…………ちゅんません、でした…………』

干からびて死にかけてたダンゴムシが声を出せるとしたら、たぶん、こんな声なのだろう。

「ふっ…………」

コタツの温もりに原始的な幸福を感じつつ、普段好き勝手にやっている成田真一郎が処

刑されたことに溜飲を下げる。近頃天晴あっぱれな仕儀であつた。

普段の子ひつじの会には何があつても関わりたくないが、今の打ち首獄門ごくもんはちよつとだけ参加したかつたのかも知れない。

『さて——モテない成田くんに本命チョコレートが贈られるという事態が、あまねく因果律に反するものであることは今の流れからも明らかでしょう。大極より生まれ出た森羅万象を否定し科学文明に反逆する、人類未曾有の破天荒です』

成田くんがつまらない駄々をこねたせいで脱線していた佐々原さんの話が、ようやく本筋に戻ってくる。もはや異論を唱える者は一人としていなかった。

『そのオーパーツとしか言いようのないチョコレートが出現したことについて、我々が考えを巡らせ、犯人を探る行為自体が不条理なのではないでしょうか。だから一向に解決しないのだと思います』

『でも、だとしたらこの件、どうやって処理すべきかしら？』

会長さんの問いに、佐々原さんは密室解明でも動機の分析でもない、第三の解決法を示してみせた。

『この件の最も合理的な解決方法は、犯人を捜すことではないと思います。』

自然の摂理に対する特異点である、あの「モテない成田くんへの本命チョコレート」を消滅させることが唯一の道なのではないでしょうか』

罪体の隠滅。事件その物の隠蔽。

根本からなかつたことにする。

佐々原三月がこの事件の中で得た情報、感じた心から選んだのは、最も横着な、だからこそ最も現実的な解決法だった。

本当なら、周囲からただちに却下されるところだろう。本音はどうあれ、生徒会室への侵入を問題視されての集まりだ。佐々原さんの論理には一分の隙もないとはいえ、侵入者の問題を曖昧にしたままになる結論が認められるわけがない。

だが、佐々原さんに対する反対意見を述べる者は、やはり一人もいなかった。

『消滅させる……って、どうするつもり？ 捨てるの？』

松宮さんですら、その反応は否定ではなく限定だった。

恐らく。

恐らく、隣の会議室に集まった成田くんと妹以外の人たちの間で、佐々原さんの唐突な提案の「意味」について無言の合意、あるいは協定が成されたのではないだろうか。

犯人が誰か察したわけではないが、それが誰であれ追い詰めることが正しくないと、そ

れぞれの立場から直覚的に悟ったのかも知れない。

ちなみに家の妹は佐々原さんの言うことを鵜呑みにしていて、成田くんは心神喪失状態と見ていいだろう。

わたしが隣室の空気を想像している間にも、鈴を転がすような佐々原さんの声が、この密室バレンタイン事件に終結を告げる言葉をつむいでいた。

『決まっています。チョコレートなのですから——』

気のせいだろうか。

『あつと言う間に口に溶けます』

佐々原さんの声音に、初めて聴くような艶つやが混じった気がした。

こうして、言語的に抹殺されていた成田真一郎がゾンビのように墓から掘り出され、問題のチョコレートを衆人環視の中で食すことになった。

『あの……持つて帰って食べちゃダメですか……？　なんか周りの視線がヒリヒリくるんですけど……』

『え？　モテないくせに持つて帰っていいと思ってるの？』

『………ですよね。僕、モテないですもんね……あ、美味しい……』

制限行為能力者のようになった成田くんは、何を言われてもただへいへいと従ってチョコレートを口に運んでいるようだった。しかし、七人もの女子に囲まれて差出人不明のバレンタイン・チョコレートを食べるといふのはどんな感覚なのだろう。

「自業自得って言葉がこれほど似合う状況もないわね……」  
 思わず、独り言を呟いてしまう。

あれだけ馬鹿雑把ばかざつぱに誰彼構わず関わりを持ってたら、ああいう状態にもなるってものだ。成田くんはちよつと気にかかった人間は特別な存在にしてしまうから、好意にも悪意にも慣れてしまつて鈍くなる。

特別を隠してしまうのは、特別の山だ。

成田真一郎の関心には希少価値という概念がない——そんなことを思いながら、わたしはコタツから足を引き抜いた。コタツの中に入れっ放しで少し汗っぼくなつた足指を開いて、閉じる。

二ヶ月半前、雪山で足を捻ひねつた痕あとはもう残っていない。我ながら不健康に白い、貧弱なくるぶしだ。腫れていた辺りをなんとなく撫でてから、その辺に放り出してあつた靴下をつまみ上げる。

妹が近場のスーパーで買ってきた紺色のソックスだった。まだ新しくて布目にほつれも

ない。それを確かめて、爪先に引っかける。

ちよつと前までは穴が開きかけていようと毛玉だらけだろうと平気で履いていたように思う。それが、最近は何んにか気になるようになっていた。……妹以外の他人に触れられたからだろうか。

雪山の小さな避難小屋で、成田くんは怪我を診るためにわたしの靴と靴下を脱がした。やめてと言ったけれどやめてくれなかった。豆腐だと思っていた物が石だったかのように、彼は硬くて重かった。わたしの知っている顔がわたしの知らない動物だったのだと思ひ知らせながら、成田くんはわたしの皮を剥ぎ取った。

ああいうことがあると知ったから、つまらないことが気になるようになってしまったんだろうか。わたしみたいのでも追われて、捕まって、あんなこともあると知ったから。隣の部屋の女子たちも、みんな知っているのだろうか。

どうせアレは、他の誰にだって、同じことをするんだろうし。

——ふと肺に冷えを感じて、吐息が漏れる。

それといっしょに靴下をふくらはぎまで引き上げ、放す。まだこなれないゴムの圧迫が、きゅつと肌をなぞった。

「……帰ろう」

ぱやきのさんとコタツに布を掛けて隠すと、成田くんがもそもそとチョコレートを食べ  
ているであろう隣室の方向を見ないようにしながら、資料室を後にした。

「しかしもつたいないな流山、ながれやまあんなにチョコもらったのに全部返しちゃうなんて。

……ああ、もらいすぎるとホワイトデーの三倍返しがキツいってやつか？」

「違うんだ……俺はあの子に操を立てると決めたんだ」

「例の眼鏡のメイドさんか……？　でも、文化祭以来会えてないんだろ？」

「ああ……生徒会の人に訊いても、なんか憐れな者を見る目で見られて一向に会わせてくれないしな。会長は俺の一途な想いに理解を示して、まるで大爆笑をこらえているように  
嗚咽してくれたけど、それでも彼女のことは教えてくれなかった。

彼女、よっぱどの恥ずかしがり屋さんなんだろうな……ふふっ、だがそこがいい」

下駄箱のある昇降口。すれ違ったサッカー部員たちまでもがチョコレートの話題をさえ  
ずっている。

どいつもこいつも、というやつだ。

バレンタインデーだのホワイトデーだの、何をそんなに生き急いでいるのだろうか？ 恋愛感情の告白などという子作りの予備營為、小市民的な集團行動で行っているものでもなかろうに。

……いや、あえて一山ナンボの安っぽい行為に貶めることで、微妙な乙女心つてやつはようやく勇氣を購<sup>あがな</sup>えるのか。木の葉を隠すなら森の中、死体を隠すなら死体の山、チョコを隠すならチョコの中——告白を隠すなら告白の中。

みんながみんな、隠している。隠れている。

今日は、そんなのばっかりだ。

空<sup>むな</sup>しい反復に倦<sup>う</sup>んだ頭を軽く振る。と、視界に入った缶ジュースの自動販売機に目が留まった。さつき佐原さんに長広舌を振るったせいかわ喉が渴いている。

わたしはばやきのさんにのし掛かられたような徒労感に足を止め、息を抜いて自販機を眺めた。自販機の缶の列へ、散漫な心地で目を流す。そのカラフルなラインナップに重なるように、さつきかかずらった由<sup>よし</sup>無し<sup>こと</sup>事が思い出された。

一度組み立てたはずのパズルは、心の中ではバラバラのピースに分解していた。

バレンタインデー。

密室。

チヨコレート。

本命と義理。

隠滅。

モテない節操なし。

隠された、告白。

「ホントに……どいつもこいつも  
そんなぼやきが口を突いて出て  
唇を、舐めた。」

## エピソード・成田真一郎

こうして。

モテない僕がモテない事実を骨の髄まで思い知らされた密室バレンタイン事件は、理性の法則を乱す問題の根本——つまりチョコレートを隠滅するという最終手段によって終息を迎えた。解決したとは言えないが、とにかくも、終わった。

なぜ会長を始めとした面々が、佐々原のあんなイージーな提案を呑んだのかはよく解らない。いや、それほどまでにモテない僕のモテないぶりに説得力があったのだろうか。まあ、あれだけモテないモテないとボロクソ言われても一言たりと言いつ返しなかつたモテない僕のモテない度数は物理法則のレベルに達しているのかも知れない。しかし。

密室に現れたあのチョコレートの事を曖昧にしまったのは——それは、そう、いかにも良くないだろうに——きっと、会議室で話している間に会長たちの中で何か悟るもの

があつたのだろう。

問題はなかつた。そう判断させる何かが。

その判断を信じられる程度には、モテない僕は今日会議室に集まった女子たちを信じていた。

こんなモテない僕の友達でいてくれる、そういう優しい人たちなんだから。

そんなことを考えながら歩くのは、昇降口へと続く廊下だった。

二月の校舎は無愛想な冷気にジツと沈黙している。なんとなく干し肉を思わせるぼそぼそした空間だったが、窓を灼く夕日に焙られて少しづつ温もりをにじませるようだった。

あの後——つまりモテない僕がみんなの前で特異点チョコレートを食べた後——、子ひつじの会番外編は打ち上げと称してお茶と歓談の席に姿を変えた。いわゆる女子会というやつで、当然ながらモテない僕には無縁の場所だ。

モテない僕はすぐごと退散した。すぐごと、という日本語のニュアンスをあれほどドラスティックに体现した人間は史上空前であつたであろうという自負がある。

女子の中では楓だけが帰りたがっていたが、春日を豺狼の群れに取り残すわけにもいか

なかったのだろう。会長を牽制し佐々原に眼ガンを付けながら部屋に残った。ついでに、モテない僕へ「ダイエットのこと黙つときなさいよ」と釘を刺してきた。

当たり前だけ言いふらす気はなかったのでムツとした。ので、「むしろちよつと太つて人妻っぽくなった方が好評なんじゃないか」と言ったらふくらはぎを刈るようなトーキックを食らった。

「お嫁さんの楓ちゃんもいいね」

などと、楓の嫁入り姿を想像したらしい春日はふにやけていたが、どう考えても「お嫁さん」ぼいのは春日の方だろう。

部屋からの去り際、桃子さんと目が合った。

「あの……美味しかったです、延べ棒」

そうお礼を言うと、桃子さんは突かれたような顔をして、それからくしゃつと笑つてジヤージのネックに顔を埋めた。だから、小さな声で何か言ったようだけど、聴き取ることができなかった。

その後すぐにサトウに絡まれて聞き返せなかったけど、大丈夫だろうか。風邪を引いた時のような顔をしていた気がする。

うつむいて露わになった意外なほど細いうなじが、冬の夕日を浴びて朱く震えていた。

「ほら……芳花ちゃんからだよ」

サトウに渡されたのは、小さな紙袋だった。寄絃芳花さんというのはサトウの友達で、モテない僕や会長たちとも面識のある中学生のお嬢様だ。人となりはサトウの正反対、つまり優美で儂げで大人っぽい感じだと思えばいい。

まさか……と思つて中身を見ると、それらしい包みが入っているではないか。

さすが芳花さん！ こちらの小鬼どもとは違つて礼儀正しく優しい！ ——などとモテない僕も思わず調子に乗りかけたが、

「試供品だよ。調子に乗らないよーに」

サトウの冷たい声に水を差される。

見ると、袋の中には「新製品のチョコレートです。是非御賞味の上、アンケートにお答え下さい。あなたの映す芳花より」と書かれた手紙が添えられていた。

そして紙袋には『寄絃製菓』の文字……ああ、そうか。寄絃さん家はお菓子も作つてるんですね。つまり義理チョコですらないマーケティングなんですね。納得ですね。モテないですからね。

「全く、芳花ちゃんもこんなモテないブタ先輩に餌をやるなんてね」

などと悪態を吐きながら、サトウは会長の隣の席に陣取った。

それから改めて他の女子たちを眺め回して、珍しく気後れたように息を吐いた。今さらの人見知りか。

……あれ？ 今あいつ、先輩って言ったか？

そう言えば、さつきも春からはどうか言ってたけど、あれはうちの高校に受かったという意味に取っていいのだろうか。それだったらお祝いの言葉の一つもかけたいところだった。——今日の機嫌の悪さだと剣突を喰わされそうだったのでやめておいた。

気にならないと言えば嘘になるけれど、まあ、後から会長にでも聞いてみよう。

今頃サトウに絡み付かれていますであろう会長からもらった板チョコは、鞆の中に収まっている。いくら男子の尊厳を粉砕する渡し方をされようと、モテない僕がもらえる貴重なチョコレートには違いなかった。

あの仕打ちも毎年のことでもう慣れたし……いや、今年はちよつと違うか。チョコの賞味期限が一日だけ長い。あと、例年はチョコの受け渡しが家の近所とかで行われるのに、今年は公開処刑状態だった。

……考えてみれば、サキ姉が人前でチヨコレートを渡してくるのは初めてのことだ。いや、モテない僕にチヨコを渡していることを公言するのも初めてかも知れない。

モテない僕のようなひょうろく玉にチヨコを渡している事実も、その渡し方が暴虐な事実も、それぞれ別方面に外聞が悪い。外面そとづらだけはむやみに麗しい生徒会長としては小さな秘密といったところだろう。

今日のメンバーは広義の身内みたいなものだし、単に遠慮が要らなかったからだろうか。何人かが大袈裟に驚いているのを見て、楽しそうでもあったけど。

もらったチヨコと言えば、佐々原には悪いことをした。

こんなモテない僕にせっかく——義理とはいえ——チヨコをくれたというのに、あんな風に返してしまった。つい、夢中になって食べさせてしまった。

別に、高校生の男女としてやましい何かがあったわけじゃないけど、およそバレンタインの作法としてありえないことをしでかしたのは間違いない。

……………

あえて……言い訳をさせてもらうなら。

チヨコを差し出した時の困り顔や。

色白の肌へ面白いように朱の差す様や。

チョコを口に含みながら上目遣いに睨んでくる仕草が……こう、脳から自重という機能を奪うと言うかなんと言うか……

途中から、胸が燃えているようで何をやっているのか自覚できていなかった。覚えてるのは、チョコを口元にあてがった時に感じた、佐々原の唇のしっとりした弾力だけだ。

ああいうのも魔性と言うのだろうか。いや……単にモテない僕の悪癖か。

大切にしたいと思っている相手ひとなのに。傷付くことがあったらと思うと爆発しそうなくらい動揺して居ても立ってもいらなくなる相手ひとなのに。二人になると、ああやって、乱暴に手を引きたくなくなってしまふ。

あの子の足を前に進めるのを助けたいのだ——そう思い込んでいたけれど。

単に、自分の方へ引き寄せたいだけなのかも知れない。

そうだったなら偽善なんてレベルじゃない。佐々原はチョコレートをくれるくらいには友達甲斐を感じてくれていたんだけど、こんなんじゃあつと言う間に愛想を尽かされるだろう。現に、さっきの審問でもいつになく厳しい態度で、モテない僕がいかにモテないかを念入りに、傷口へ塩を揉み込むように思い知らせてくれた。

彼女の素直で控えめな性格に甘えて勘違いしないよう、改めて気を付けないといけない

な……うん。

こういう時は仙波にキツイ言葉でもかけてもらいたい気分だが、僕が会議室を出た時にはもう、資料室にあいつの姿は無かった。

残念に思う反面、安心もした。今日はチョコレートにまつわるいろいろがありすぎて、仙波の仏頂面を見ながら何を想えばいいのか見当が付かない。それに、佐々原の様子からして、さっきの密室チョコの顛末についても聞かれているだろう。

……仙波には全く関係のない話。なんだろうけど、モテない僕としては、なんとなく、チョコをもらったのもらつてないのって話を仙波に聞かれたのは気が重い。

だから、会いたいような、会いたくないような、宙ぶらりんな気分で廊下を歩く。

そして昇降口まで来たところで、その心の中でぶらぶらしていたボサボサ頭に行き会った。

仙波明希。

ぽつんと小柄で、体のどこでも一掴みにできそうなくらい細ほそっこくて、眼鏡の向こうの瞳はいつだって眠たげな、彼女。

仙波には冬が似合う。夏には強すぎる光に眩くらまされて淡い蜃気楼に消えてしまいそうな

彼女が今は、冬の乾いた空気に引き締められて、くつきりと白いような命を世界に刻んでいる。

何やら手元を眺めながら、自動販売機の前に突っ立っていた。

会いたくないような、などとネガティブな方に揺れていたのにもかかわらず。

「よお、仙波」

モテない僕は、仙波に声をかけていた。そうだ。モテない成田真一郎の逡巡なんて、そんなものなのだ。

仙波はちよつと反応しなかった。気にするまでもない。いつものことだ。そのまま近付いて、彼女の視線を追う。

仙波の手の中には、あるはずのない物があった。

「あれ？　なんでお前……」

仙波が持っていたのは缶コーヒーだった。スーパーで特売しているようなローカルなメーカーの物で、ロング缶なのに一〇〇円ということに愛飲している生徒も多い。

自動販売機の前なのだから持っていておかしいことはないと思われるかも知れないが、仙波はコーヒーやお茶の類を徹底して飲まないようにしている。目に悪いからだとかなんだとか。

「押し間違えたのよ」

僕にのぞき込まれているのが鬱陶しかったのか、ようやく仙波が反応を返してくれた。端的に答えて、物憂げに見上げてくる。

今日、初めて目が合う。相変わらず眠そうで、だるそうで、隠された泉のような目だった。

ただそれだけで笑顔になってしまいそうになるのを我慢して——さすがに若干気持ち悪いという自覚はあった——真顔を保ち、訊いた。

「それ、どうするんだ？」

まさか返品するわけにもいかないだろう。日頃の習慣を曲げて飲むのだろうか。

余計なお世話だバカヤロウ死ぬばいいのに——などと返されるかと身構えたが、仙波の返事はあらゆる意味で予想を裏切った。

缶を、こちらに差し出してきたのだ。

「三〇〇円で売るわ」

……………

モテない僕に売るという発想も意外だが、価格設定もささやかに法外だった。

「なぜ値段が三倍に……？」

「需要と供給よ」

ついと逸れた仙波の視線を追うと、自販機の中のコーヒーの下には「売切うりきれ」のランプが灯っていた。なるほど、すぐに飲みたければ三〇〇円払う外ほかないというわけか。ただし、残念ながらモテない僕は、

「いや、今は喉のど渴いてないし」

これでは三倍に値上がりするほどの需要にはならないだろう。と、思ったのだが。

「ん」

仙波はお構いなしに、モテない僕の胸元にまだ暖かい缶コーヒーを押し付けてくる。いつになく強引な仙波は、いつも通りのぶっきらぼうな声で言った。

「好きなんでしょ？」

それは。

そのセリフを聞くのは、二度目のことだった。

忘れもしない。初夏のある日、教室。時間は今より少し早いくらいだろうか。

ちよつとばかり落ち込んでいたところに、仙波から声をかけてくれた。その時に持って

きてくれたのも、この缶コーヒーだ。

出会ったばかりの頃、こっちから仙波に贈ろうとして突き返された缶コーヒーだ。

だから仙波は、あのコーヒーが僕の好物だと思っている。だから仙波はあの時も「好きなんでしょ？」と訊いてきた。この缶ゴトヒトが、好きなんでしょ、と。

あの時は不意を突かれて、質問の意味を誤解して、あわてふためいてろくに返事もできなかった。

でも、さすがに二度目だし、あれからいろいろあったから。

それでも深呼吸をした後、僕は財布から三〇〇円出し、仙波の差し出す缶コーヒーに指をかけた。熱い。

それでもしっかりと掴んで、答えた。

「うん。好きだよ」

当然ながら。

仙波は特に反応もしなかった。モテない僕の缶コーヒーの好き嫌いなど興味もないだろう。せいぜい、ちよつと視線を下げた程度だ。

逆に、モテない僕は、その言葉を言えたことになんとか満足を覚えていた。今度は笑顔  
を自重せず、缶を引き寄せる。仙波の握力の抵抗があったのは一瞬で、コーヒーは僕の手  
中に入った。

入れ替わりに差し出した三〇〇円を仙波の掌に落とす。それを握り込んだ仙波の手は本  
当に小さくて、その手かもそもそとポケットに突っ込まれるのを、思わず目で追ってしま  
う。

「……………」

後は何も言わず、仙波はさっさと背を向けて下駄箱に向かった。

モテない僕は、それを見送りながら缶を開け、口を付ける。ミルク味の濃<sup>み</sup>いコーヒーは  
いかにも庶民的な味わいでホッとさせてくれる。

靴を履き替えた仙波は、ほんの一瞬、こちらを見た。目が合った気もするが、ちよつと  
嫌そうな顔をしただけで去って行った。いつも通りの反応で、やっぱり安心してしま  
う。いや、これで安心するのもどうかとは思うけど。

モテない僕は飲み終えた缶を捨て、自分も下駄箱に向かう。  
焦ることはなかった。

運動不足で歩幅の狭い仙波の足は、決して速くない。

だから。

足の浮き立つままに、  
急ぎ足で追い付こう。

(子ひつじは迷わない 番外編

『VS毒突きチヨコレート事件』

おしまい)